# 博多 Ⅳ

福岡市埋蔵文化財調査報告書第119集

1985

福岡市教育委員会

# 博多 Ⅳ

福岡市埋蔵文化財調査報告書第119集

1985

福岡市教育委員会

# 序　文

旧博多地区は、弥生時代以来、大陸文化流入の門戸として栄えてきたところです。とりわけ「中世の博多」の繁栄と輸入陶磁器の豊富さは国内外から多くの関心を集めるところとなっております。

近年、新交通体系の整備に伴い、市街地の再開発が活発に進められ、貴重な埋蔵文化財の破壊が問題となってきております。

福岡市教育委員会では、やむを得ず消滅してゆくこれらの埋蔵文化財については、記録保存に努めているところであります。本書は昭和59年度に行なったビル建替工事に伴う発掘調査の記録を収録したものです。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚です。

調査に際しましては福岡商事株式会社福田洋之助氏をはじめ、多くの方方のご理解とご協力をいただきましたことにたいし、心より感謝の意を表するものであります。

昭和60年３月31日

福岡市教育委員会

教育委員長　西津　茂美

# 例　言

1．本書は、博多地区再開発ビル建設に伴い、福岡市教育委員会が1984年度に実施した緊急発掘調査の報告書である。

2．遺構の呼称は記号化して番号を付した。溝→ＳＤ、土壙→ＳＫ、井戸→ＳＥ、甕棺→Ｋとし、例えばＳＤ01などと表示する。

3．各遺構・遺物の実測、写真撮影は、横山、下村で分担して行なった。遺物実測は常松幹雄、田中克子両氏のご協力をたまわった。

4．本書の執筆・編集は、横山、下村が行なった。

# 本文目次

序文

Ⅰ　はじめに……1

1　調査に至る経過……1

2　調査の組織……1

Ⅱ　遺跡の立地と環境……3

Ⅲ　調査の記録……5

調査地点の概要……5

1　弥生時代……6

2　古墳時代……8

(1)　溝遺構……8
(2)　土器包含層……8

3　中世期……13

(1)　井戸址……13
(2)　土壙……19
(3)　撹乱層の出土遺物……28

Ⅳ　まとめ……34

# 挿図目次


Fig. 1 博多遺跡群第24次調査地点図（1/4000）…… 2
Fig. 2 調査区全体図（1/100）…… 4
Fig. 3 K－1号甕棺墓出土状況実測図（1/30）…… 6
Fig. 4 K－1号甕棺及び弥生式土器実測図（1/10、1/2.5）…… 7
Fig. 5 SD01溝出土状況実測図（1/40）…… 9
Fig. 6 包含層土器出土状況実測図（1/15）……10
Fig. 7 SD01溝及び土器包含層出土土器実測図(1)（1/3）……11
Fig. 8 SD01溝及び土器包含層出土土器実測図(2)（1/3）……12
Fig. 9 SE01井戸址出土状況実測図（1/30）……13
Fig. 10 SE02・03井戸址出土状況実測図（1/30）……14
Fig. 11 SE04・05井戸址出土状況実測図（1/30）……16
Fig. 12 SE01～05井戸址出土土器実測図（1/3）……18
Fig. 13 SK01～04土壙出土状況実測図（1/30）……20
Fig. 14 SK05土壙出土状況実測図（1/30）……21
Fig. 15 SK06・07土壙出土状況実測図（1/30）……22
Fig. 16 SK10土壙出土状況実測図（1/30）……23
Fig. 17 SK11・16土壙出土状況実測図（1/30）……24
Fig. 18 土壙出土遺物実測図(1)（1/3）……30
Fig. 19 土壙出土遺物実測図(2)（1/3）……31
Fig. 20 土壙出土遺物実測図(3)（1/3）……32
Fig. 21 攪乱層出土遺物実測図（1/3）……33

# 図版目次


PL.1 （上） 調査区南側全景……38
（下） 調査区北側全景……38
PL.2 （上） K－1号甕棺墓出土状況……39
（下） 包含層土器出土状況……39
PL.3 （上） SE01井戸址出土状況……40
（下） SE02・03井戸址出土状況……40
PL.4 （上） SE04井戸址出土状況……41
（下） SE05井戸址出土状況……41
PL.5 （上） SK01土壙出土状況……42
（下） SK05土壙出土状況……42
PL.6 （上） SK06・07土壙出土状況……43
（下） SK10土壙出土状況……43
PL.7 出土遺物 (1)……44
PL.8 出土遺物 (2)……45


# 表 目 次


表1 博多遺跡群調査地点一覧表……3

# Ⅰ はじめに

## 1．調査に至る経過

旧博多地区では、地下鉄路線内・築港線拡幅工事などの公共事業に加え、民間開発に伴う緊急発掘調査をこれまでに23次に亘って行なっている。昭和59年１月11日、福岡商事株式会社から博多区冷泉町１番１号地内におけるビル建替の申請が教育委員会に提出された。教育委員会では昭和52年から53年にかけて北隣りの地下鉄路線内店屋町工区、昭和54年から55年にかけて南隣りのマンション建設に先立つ調査を行ない、弥生時代から中世の博多に関する良好な遺構・遺物を検出している。当該地は、この２調査地点に挟まれた位置にあたり、連続して遺構・遺物群の存在が予想された。教育委員会では、周辺の調査成果をもとに、施主福岡商事株式会社、施工業者清水建設株式会社と遺跡の取り扱いについて協議をかさね、旧ビル解体後、昭和59年４月20日から本調査を行なうことになった。

**調査面積**：370㎡

**調査期間**：昭和59(1984)年４月20日～５月23日

## 2．調査の組織

**調査委託**：福岡商事株式会社（福岡市博多区冷泉町１番１号）

**調査主体**：福岡市教育委員会文化部文化課

**事務担当**：折尾　学（埋蔵文化財第２係長）
古藤国生

**調査担当**：横山邦継、下村　智

**調査・整理作業**：亀川照義、川田　初、竹林義之、村本健二、井上ヒデ子、鬼尾喜代子、亀川スミ子、川田久子、岸田　浩、筒井ひとみ、土斐崎靖、富田マチ子、長野照子、西山秀子、原口マサ子、平田美絵子、溝口博子、柳井順子、吉田世喜子、脇坂マキノ、花畑照子、別府加代子、矢野隆子

なお、今回の発掘にあたっては、施主福岡商事株式会社、代表取締役福田洋之助氏及び、清水建設株式会社九州支店、今田　博氏の各氏には多くのご理解とご協力をたまわったことを記して深く感謝する次第である。

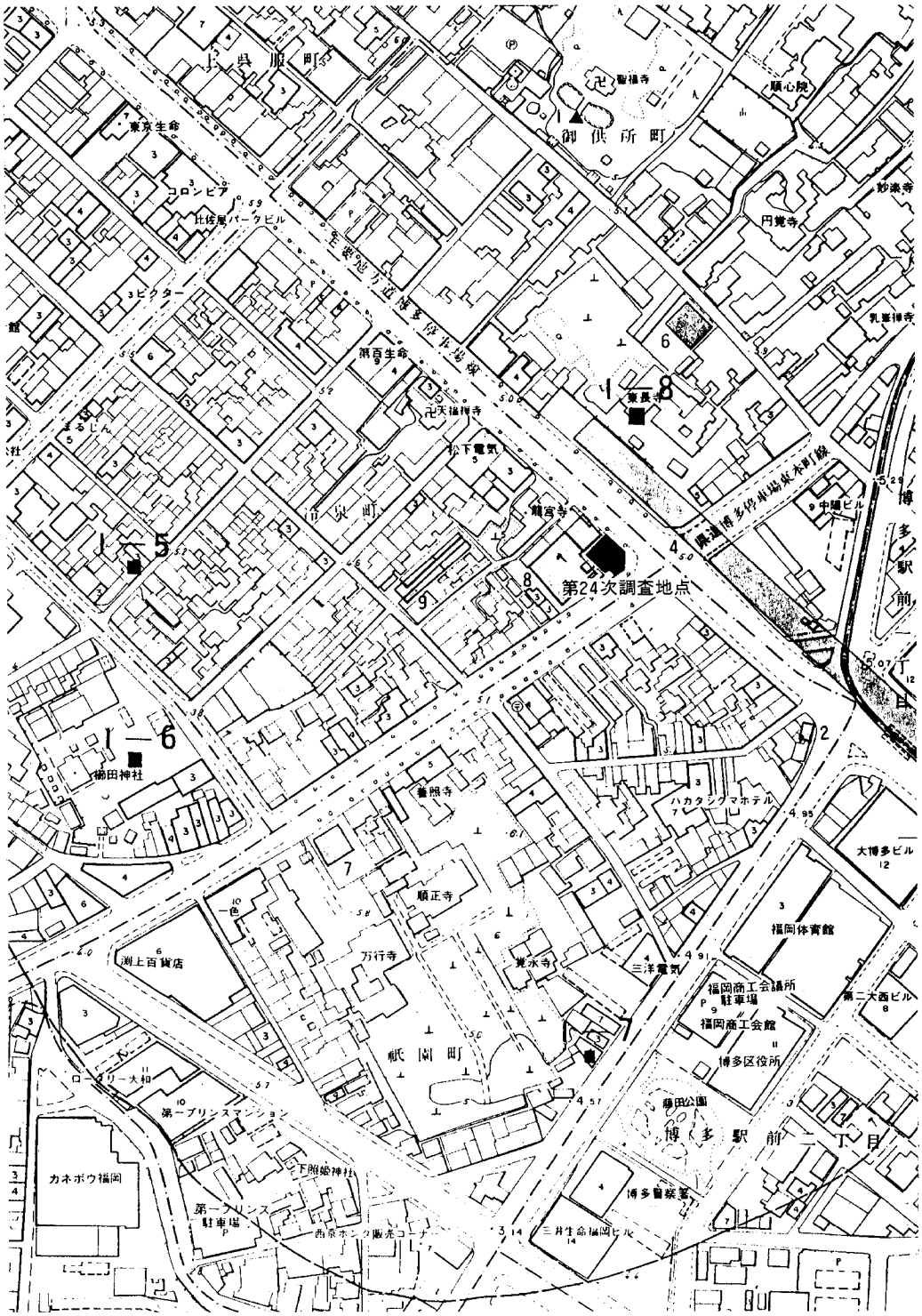



Fig.1　博多遺跡群第24次調査地点図（1／4000）

# III　遺跡の立地と環境

博多遺跡群は福岡平野の中央部を北西に流れる那珂川と比恵川の土砂流下と博多湾をめぐる左転廻流とによって形成された古砂丘上に立地している。博多遺跡群の本格的な調査は地下鉄路線内祇園町工区から開始され、築港線拡幅工事などの公共事業に加え、民間開発に伴なう調査も既に24次を数える。地下鉄路線内の調査では弥生中期初頭の甕棺群、中世の溝、土壙、墓、井戸、柱穴群、遺跡群中央部では、奈良時代から中世に亘る良好な遺構・遺物群、遺跡群南側では鴻臚館式軒丸瓦や石帯、古墳時代の集落址、方形周溝墓、土壙墓、木棺墓、中世の土壙や溝などの遺構群が検出されている。また第14次調査では夥しい白磁の集積や、今回の調査区に隣接した第４次調査では「宋人百堂」を想起させる中国人名を中心とした墨書土器が 100点ほど出土している。このように、博多遺跡群には弥生時代から中世に至る博多の歴史を解明する重要な遺構・遺物群が包蔵されている。民間開発に伴なう発掘調査は以下のとおりである。

**表１　博多遺跡群調査地点一覧表**

1984年５月現在

| 次 | 調査期日 | 所在地(博多区) | 対象面積(調査面積) ㎡ | 調査原因 | 備考(調査担当) |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 78. 11～79. 1 | 御供所町・東長寺境内 | (360) | 納骨堂建設 | 本調査(山崎龍雄、浜石哲也、池崎譲二) |
| 2 | 79. 4 | 店屋町99 | (約100) | ビル建設(吉小路ビル) | 立会、土層図作成(山崎) |
| 3 | 79. 11 | 祇園町・萬行寺境内 | (240) | 納骨堂建設 | 本調査(柳沢一男、横山邦継) |
| 4 | 79. 12～80. 3 | 冷泉町７－１ | 1,982.9(1,100) | ビル建設(祇園エクセレンスマンション) | 本調査『博多Ⅰ』1981、『博多Ⅱ－図版編』1982(折尾学) |
| 5 | 79. 12 | 下呉服町346 | 1,177.6 | ビル建設(日通ビル) | 試掘調査、地表下4.5ｍから碇石出土(柳田純孝、二宮忠司) |
| 6 | 80. 3～4 | 冷泉町155　他 | 1,035.14(640) | ビル建設(共同住宅) | 本調査(折尾) |
| 7 | 80. 6～8 | 祇園町130 | (210) | ビル建設(サマリヤマンション) | 本調査(折尾、池崎) |
| 8 | 80. 8～10 | 御供所町・東長寺境内 | (600) | 本堂建設 | 本調査(池崎) |
| 9 | 80. 9 | 下呉服町75 | 197.78 | ビル建設(リコー商会ビル) | 試掘調査(横山) |
| 10 | 80. 12 | 冷泉町474－９ | 353.4(54) | ビル建設(塚喜商事ビル) | 本調査『博多Ⅰ』1981(池崎) |
| 11 | 80. 12 | 御供所町３－30 | 244.06 | ビル建設 | 試掘調査(横山) |
| 12 | 81. 6 | 中呉服町152、153 | 463.59 | ビル建設(杏林薬品) | 試掘調査(横山) |
| 13 | 81. 7 | 駅前１丁目121～127 | 1,639.443 | ビル建設(ナショナルビル) | トレンチ調査(横山) |
| 14 | 81. 8 | 店屋町４－15 | 810.8 | ビル建設(興和新薬ビル) | 本調査(池崎) |
| 15 | 81. 8 | 上呉服町569 | 2,275.02 | 駐車場建設 | 試掘調査(横山) |
| 16 | 81. 9 | 店屋町246～248 | 775.11 | ビル建設(九勧ビル) | 本調査(杉山富雄、池崎) |
| 17 | 81. 11 | 駅前１丁目98 | 810.8 | ビル建設(第一生命ビル) | 本調査『博多Ⅲ』1985(柳沢、杉山) |
| 18 | 82. 1 | 駅前２丁目８－14 | | ビル建設 | 試掘調査(池崎) |
| 19 | 83. 4 | 櫛田神社境内 | (約380) | 社務所建設 | 本調査(力武卓治、大庭康時) |
| 20 | 83. 4 | 駅前１丁目99 | 1,400 | ビル建設(殖産ビル) | 本調査『博多Ⅲ』1985(柳沢、杉山) |
| 21 | 83. 5 | 駅前１丁目18－１ | 220 | ビル建設(岡部産業ビル) | 本調査『博多Ⅲ』1985(柳沢、杉山) |
| 22 | 83. 9 | 冷泉町189　他 | 1,566(800) | ビル建設(チサントーカンマンション) | 本調査『博多Ⅲ』1985(柳沢、杉山) |
| 23 | 84. 2 | 龍宮寺境内 | (約300) | 本堂建設 | 本調査(折尾) |
| **24** | **84. 4～5** | **冷泉町１－１** | **370** | **ビル建設** | **本調査『博多Ⅳ』1985**(横山、下村智) |

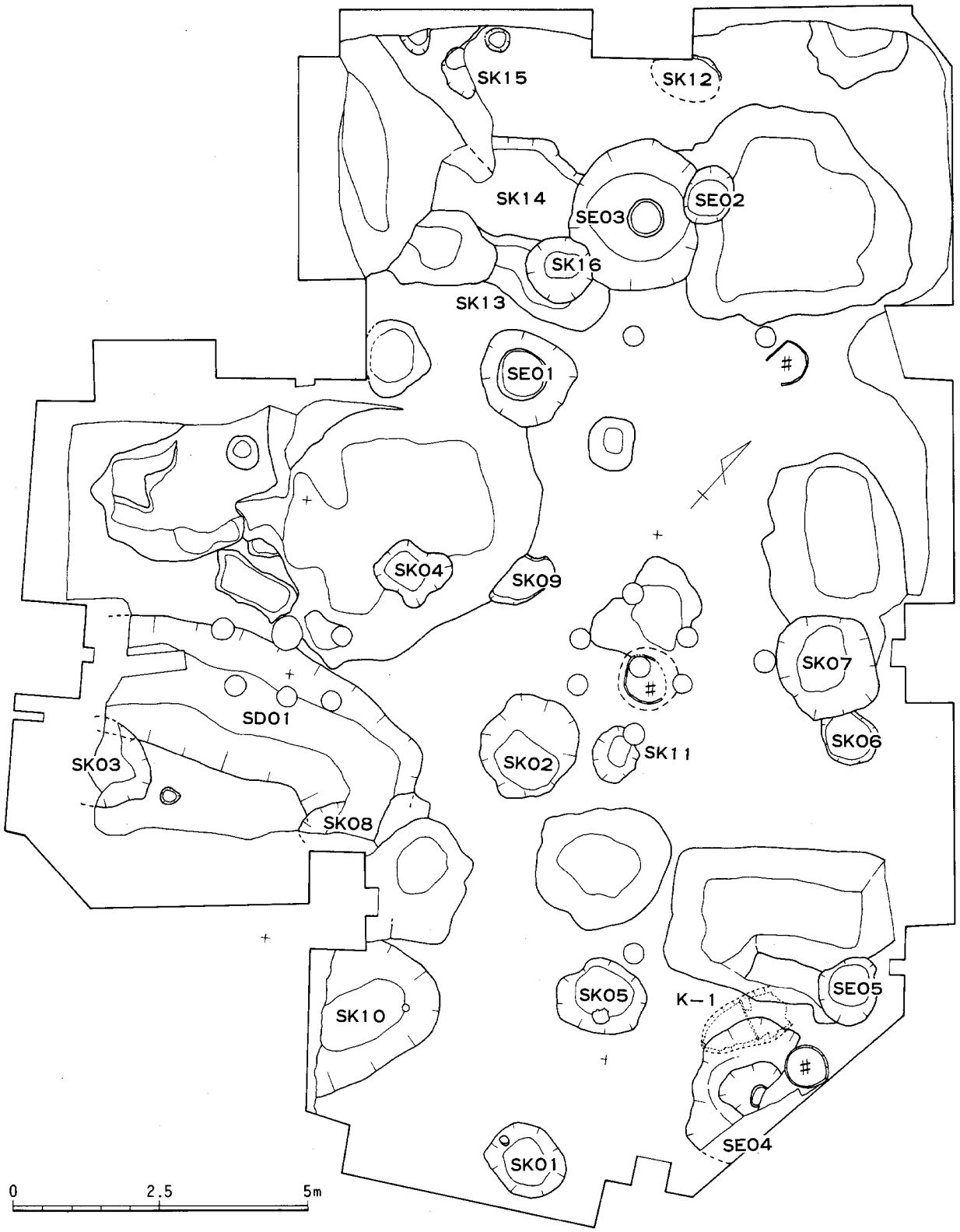



Fig.2　調査区全体図（1／100）

# III 調査の記録

**調査地点の概要**

博多遺跡群第24次調査地点は、遺跡群中央部南側寄りにあたり、標高５ｍ前後を測る。

調査は、先ず既存建物の基礎によって撹乱された上層部の除去作業から始めたが、基礎に地中梁がはいっていたため、撹乱層が意外と深く、地表面から２ｍ前後は全て撹乱を受けていた。

撹乱層からは、弥生式土器や甕棺片、５世紀初頭の土師器器台、玉縁口縁の白磁碗、四耳壺、青白磁合子、龍泉窯系の青磁碗、磁灶窯系の黄釉鉄絵大盤、施釉陶器などの輸入陶磁器から、国産の11～12世紀を主とする土師器坏・皿、それに近現代の陶磁器に至るまで各種の遺物が出土した。

検出された遺構は、弥生中期前半の甕棺墓１基、溝状遺構１条（SD01）、井戸址５基（SE01～05）、土壙16基（SK01～16）などがある。甕棺墓は調査区南側の黄白色砂層に埋置されていたが、井戸址によって下甕の底部が破壊されていた。破片は井戸址内と甕棺周辺に一部散乱していた。周辺には別個体の甕棺片も検出され、遺構確認面や中世期の土壙に混入した状態で出土しているものもある。甕棺墓及び破砕された甕棺片は調査区南側に集中して分布しており、地下鉄路線内調査区に連続する甕棺分布域の一部に当るものと考えられる。

調査区西側では直角にコーナーを持つ溝状遺構の一部が検出された。溝状遺構の埋土は茶褐色砂層で、主に５世紀代の土師器を出土する。本調査区西隣りの発掘調査区では、この溝状遺構がどのように伸びていたかは判然としないが、溝の形状から方形周溝墓の周溝の可能性もある。その他、調査区北側の基礎壁近くでは、茶褐色砂層に５世紀初頭の甕、器台、丸底壺、脚台付埦、埦などが一括して発見された。周辺が基礎及び撹乱によって黄白色砂層まで掘り込まれていたので遺構として確認することはできなかったが、完形品を一括して配置した状態を呈している。

奈良～平安時代の遺構は判然としないが、須恵器高台付坏やツマミを持つ坏蓋などが出土し、撹乱層、井戸址、土壙などから混入した状態で検出された。この時期の生活面も本来は存在したものと考えられる。

最も多く検出された遺構群は井戸址及び土壙群である。黄白色砂層に掘り込まれ、埋土は黒褐色～灰褐色を呈しカーボンなども含まれる。井戸址は北側と南側に分布し、井筒には桶が使用され、掘方は灰茶褐色砂層と黄白色砂層の互層で埋められている。土壙は調査区全面に広がっており、おおむね円形か楕円形に近いプランを持つ。井戸址及び土壙からは主に11～12世紀に属する青・白磁碗・皿の他、褐釉壺・瓶、黄釉鉄絵盤、施釉陶器などの輸入陶磁器類、国産の土師器、瓦器、石鍋なども出土している。

# 1　弥生時代（Fig. 4　PL. 2）

弥生時代に関する遺構は少なかったが、地下鉄路線内店屋町工区で弥生中期前半の甕棺墓16基及び祇園駅出入口の調査で6基の甕棺墓が発見されており、それに連続すると考えられる甕棺墓が1基検出された。甕棺墓（K－1）は調査区東南側の隅で発見され、SE04井戸址によって胴部の一部、SE05井戸址によって北甕の底部が切られていた。甕棺は弥生中期前半代に属する汲田タイプの合口甕棺で主軸をN－21°－Eにとる。墓壙は基盤層である黄白色砂層に掘り込まれている。周辺はかなり撹乱されており、撹乱層の中から弥生中期の甕棺片が数個分出土している。浅く埋置された甕棺が撹乱によって破壊散乱したものであろう。その他、SK02土壙西側の包含層から弥生後期の壺、SK05土壙から甕底部、SK10土壙から丹塗りの鉢形土器が混入した状態で出土している。

**出土遺物**

Fig. 4、1はK－1号甕棺の上甕と下甕である。上甕は内側に肥厚したT字形口縁を持ち、胴部中央部には三角突帯を2条施す。明褐色から灰褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好で内外面ともナデ調整が施されている。下甕は底部を欠失しているが、口縁部内側が肥厚するT字形口縁で、胴部中央部には三角突帯を2条施す。色調は淡灰褐色から茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。焼成は良好で口縁部及び外面はナデ調整、内面は細かなハケ目調整となっている。2は現位置から遊離した小児甕棺で、やや内傾したL字状口縁を持ち、胴部に垂れ気味の三角突帯を一条貼付する。内外面ともナデ調整で、赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良好である。3は後期終末の甕形土器で、直口する口縁部を持ち、頸部に刻目突帯を貼付する。暗黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質である。内外面ともナデ調整が施されている。4はSK10の覆土中から出土した丹塗り磨研の鉢形土器である。口径13.5cm、器高7.0cmを測り、厚手作りとなっている。色調は丹塗りのため赤褐色を呈し、胎土に細砂を含み、焼成は良好である。本来は甕棺墓の祭祀に関係するものであろうか。

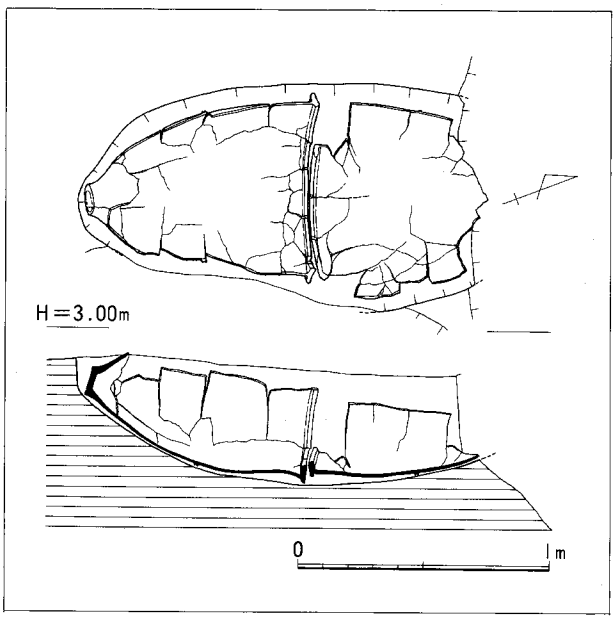



Fig.3　K－1号甕棺墓出土状況実測図（1／30）

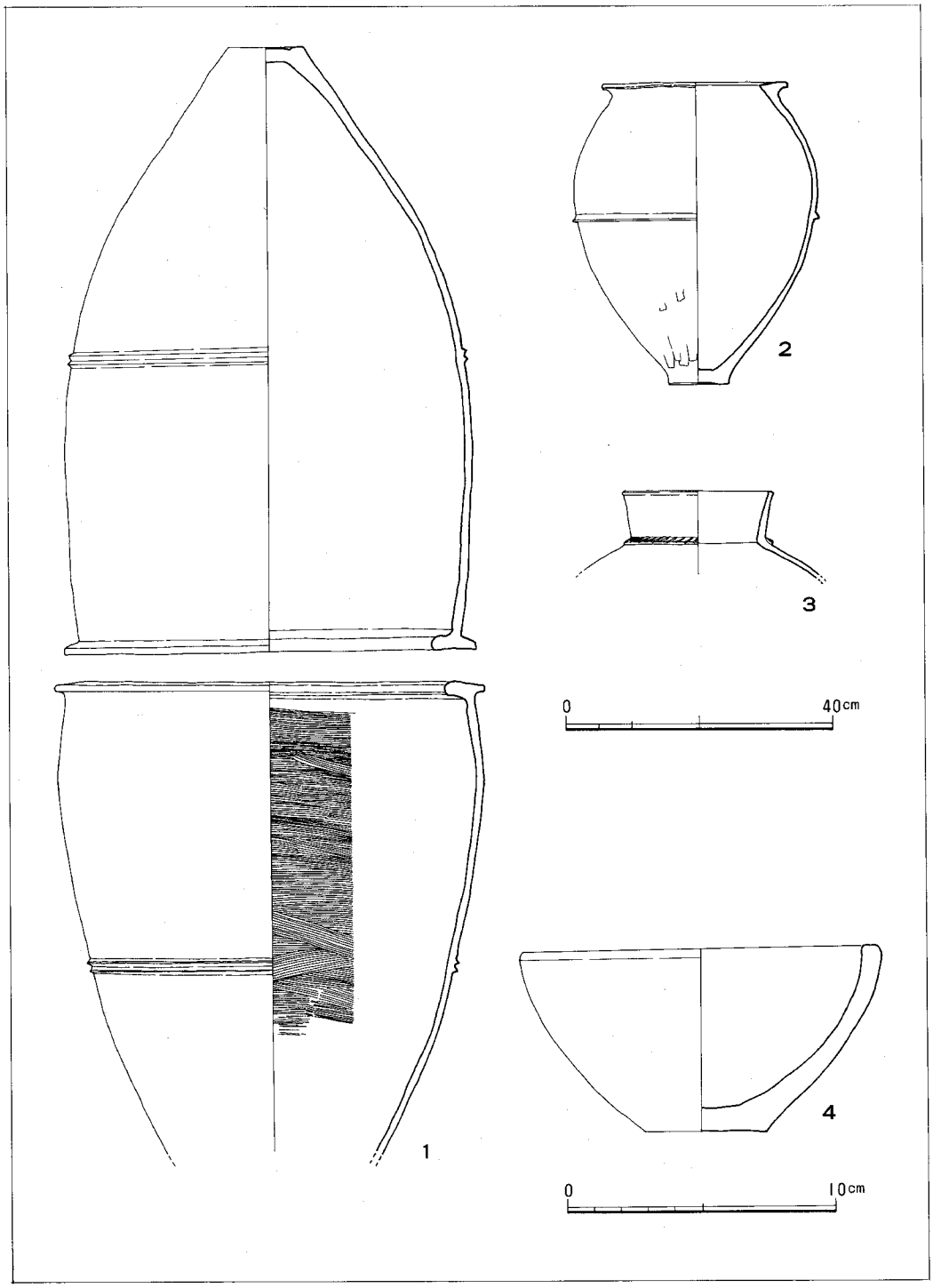



Fig.4　K－1号甕及び弥生式土器実測図（1／10　1／2.5）

## 2　古墳時代

(1)　**溝遺構**（Fig. 5　PL. 1）

調査区西側に溝遺構（SD01）の一部を検出した。西側及び南側部分は調査区外へ伸びており、全体像を把握し得ないが、東西５ｍ50cm、南北70cmを確認できる。上部はかなり削平され、断面は緩やかな皿状を呈する。幅２ｍ35cm、深さ40cmを測る。溝覆土からは５世紀初頭の土師器甕、小形丸底壺、高坏などが出土している。

(2)　**土器包含層**（Fig. 6　PL. 2）

調査区北側の既設建物基礎近くに布留式併行期の土師器がまとまって検出された。本来は遺構に伴うものと考えられるが、基礎コンクリートやパイル、撹乱などによって一部しか残っておらず、はっきりしたことは分らない。包含されていた土層は黒褐色砂層で、甕、埦、脚台付埦、小形丸底壺などがある。埦のひとつは器台に載っていたものが、そのまま倒れた状態を示す。これらの土師器群はさらに北側に伸びるものと考えられ、基礎下のコンクリートパイルによって完全に押し潰された甕形土器があった。

**出土遺物**

Fig. 8、2・7～9は溝遺構（SD01）から出土した土師器である。2は甕形土器の口縁部で、口径18.0cm、外反し口縁端部はハネ上げ状となる。色調は外面が淡褐色、内面は淡黄褐色を呈する。口縁内外面はヨコナデ、肩部は外面がヨコナデ、内面は左から右斜め上方へのヘラケズリが施される。胎土には細砂を多く混入しやや粗い感じを受けるが、焼成は堅緻である。7は小形丸底壺で、口縁部がやや内湾しながら大きく外反する器形をとる。復元口径 9.0cm、色調は暗赤褐色を呈し、内面はヨコナデ、外面は細かい横方向のヘラ磨きが観察される。胎土は非常に緻密で、焼成も堅緻である。8は中形の壺形土器になるものと考えられ、球形の胴部で頸部はややくびれ、口縁部は立ち上る。外面は暗赤褐色、内面は赤褐色を呈し胎土は非常に緻密で、焼成も堅緻である。外面は細かい横方向のヘラ磨き、内面は指おさえの後、ヨコナデ調整が加えられている。外面の一部にはカーボンが付着する。9は、小形丸底壺であるが、体部から明瞭な境をもたずに緩やかに口縁部が外反する。口径12.8cm、推定器高 7.0cmになるものと考えられる。非常に薄手の作りで、胎土は精良、焼成も堅緻である。外面の色調は灰黒褐色、内面は明褐色を呈す。外面調整は、口縁部がヨコハケの後ナデ調整、体部は左斜下方向のハケ調整の後ナデ調整や細かなヘラ磨きが加えられている。研磨の一部は細い沈線状となる。内面はヨコナデ調整が施されている。その他、図示し得なかったが、SD01からは２に類似する甕形土器や、脚部が緩やかに開き、円形の透孔を四個配置する高坏の脚部、及び筒部と裾部が屈折する高坏の脚部、浅い皿状の台部を持つ器台などが出土している。

Fig. 7及びFig. 8、1・3～6、10～13は包含層から一括、または散発的に出土した土師

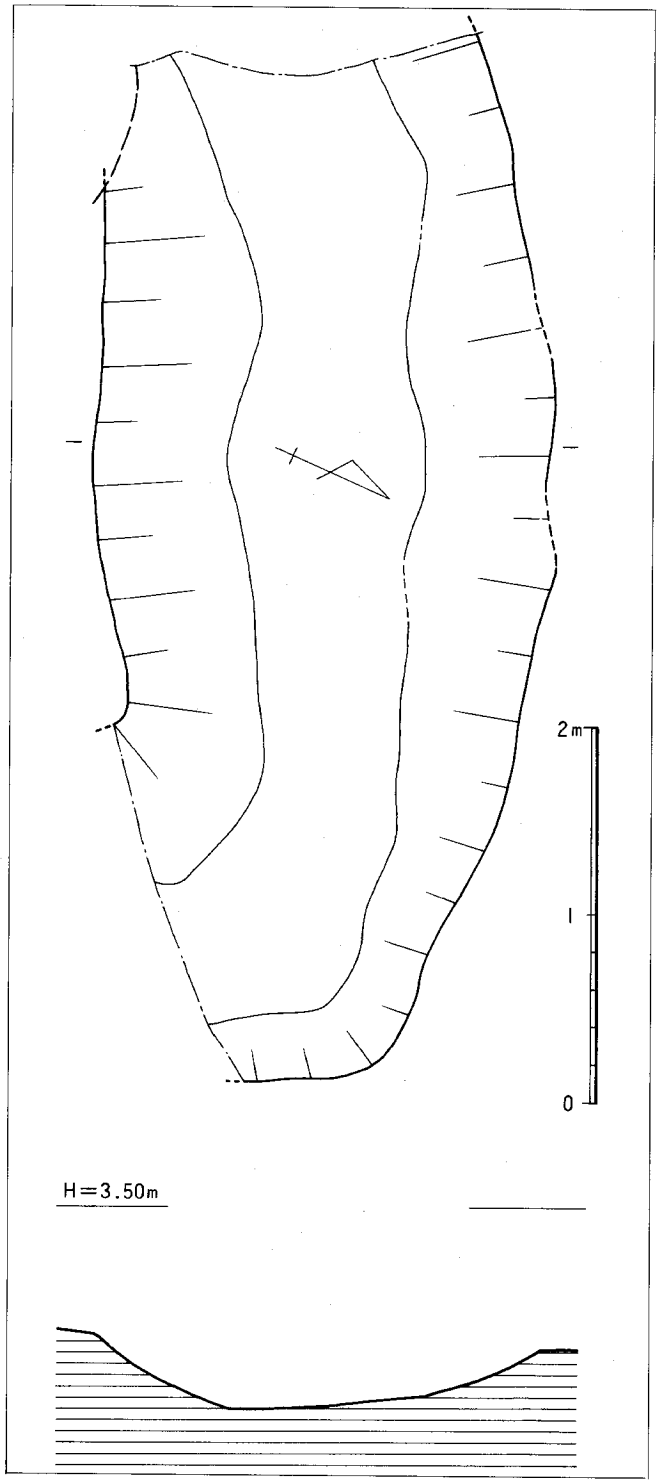



Fig.5　SD01 溝出土状況実測図（1／40）

器類である。Fig. 7、1は口径16.2cm、器高23.2cm、胴部最大径20.7cmを測る甕形土器である。口縁部は内弯気味に外反し、端部は僅かに内側に引き伸ばす。胴部最大径は中位に位置する。灰褐色を呈し、胎土に石英を中心とした砂粒を含む。焼成は堅緻である。調整は口縁部内外面はヨコナデ、肩部外面はタテ方向のハケ目、胴部中位はヨコハケ、下半部はタテハケ目が施される。ハケ目はともに非常に細かいものである。胴部内面は左からやや右斜上方向の稜線のはっきりしないヘラケズリ、底部から胴中位近くまでは指おさえによる指頭痕が観察される。外面にはカーボンが付着し、厚い所では1㎜位認められる。2は口径17.1cm、器高26.5cm、胴部最大幅24.0cmを測る1と良く似た甕形土器である。口縁部は内弯気味に外反し、端部は僅かに内側につまみ出す。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を含むが、薄手作りで焼成は堅緻である。口縁内外面はヨコナデ、胴部はヨコハケ、胴部下半はタテハケ及び斜ハケ目調整が施される。内面は上半が左から右方向のヘラケズリ、下半は右から左上方へのヘラケズリ、底部近くは指おさえ調整となっ

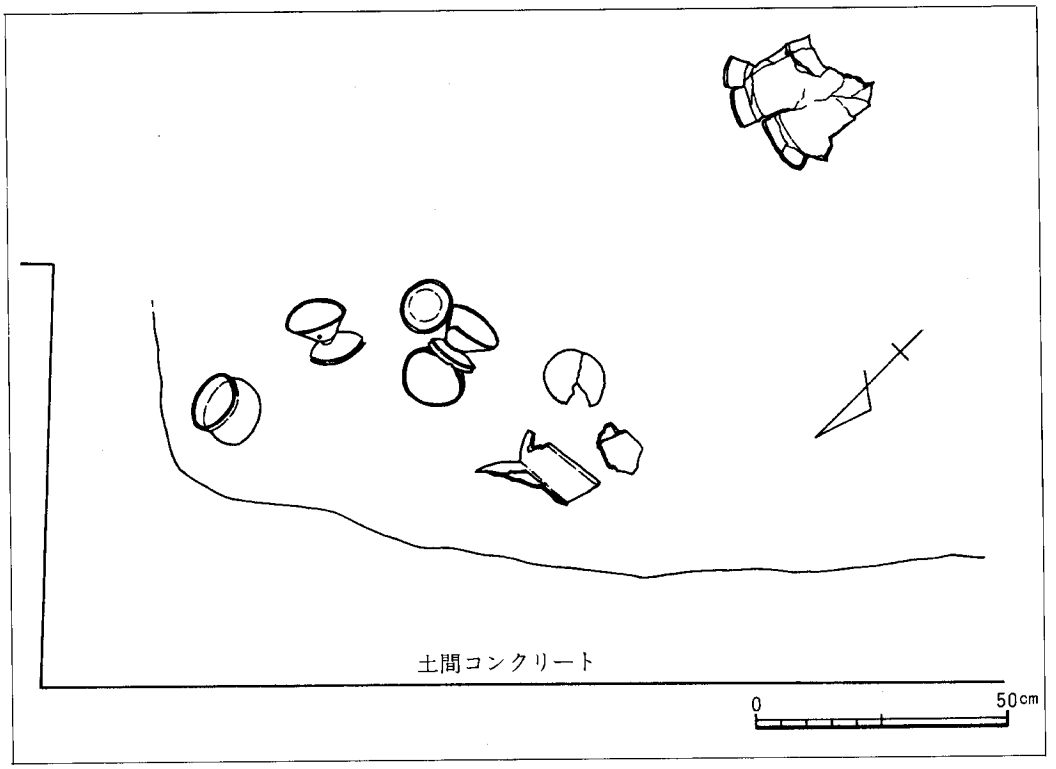



Fig.6　包含層土器出土状況実測図（1／15）

ている。Fig. 8、1は口径18.2cmの壺形土器である。口縁部は頸部から緩やかに外反し、端部は平坦となり、内側に僅かにつまみ出す。口縁内外面はヨコナデ、胴部外面は横方向のハケ目調整、内面は左から右方向のヘラケズリ、頸部の粘土接ぎめの部分は指おさえが認められる。色調は淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み肌理が粗い。焼成は良好である。3は、粗雑な作りの甕形土器である。口径16.0cm、口縁部は外反し端部は丸く収める。器形は全体に歪つで、外面調整は口縁部がハケ目調整の後ヨコナデ、胴部は斜ハケ目の後、上半はヨコナデが施される。内面は口縁部が横及び斜方向のハケ目、胴部は粗い斜のハケ目、下半は左から右上方のヘラケズリ、頸部はハケ目調整の後に指おさえが施されている。色調は暗赤褐色を呈し、胎土に石英砂の混入がみられ、やや粗い。焼成は堅緻である。4・5は良く似た器台で同所で出土した。4は口径10cm、器高 8.7cm、5は口径 9.7cm、器高 9.0cmを測る。共に浅い台部とストレートに開く脚部を持つ。4の色調は茶褐色を呈し、胎土は精良で焼成も良い。外面は横方向の細いヘラ磨き、脚部内面は斜ハケ目がみられる。台部内面は剝落して調整は判然としない。5は明褐色で胎土、焼成とも良好である。外面はナデ調整と研磨、内面は細かい斜ハケ目の後、指おさえが施されている。共に透孔は2個である。6は脚台付の埦で、口径13.1cm、器高 7.4cmを測る。低い厚手の脚が付き、体部との境は沈線状になる。明褐色から黄褐色を呈し、胎土

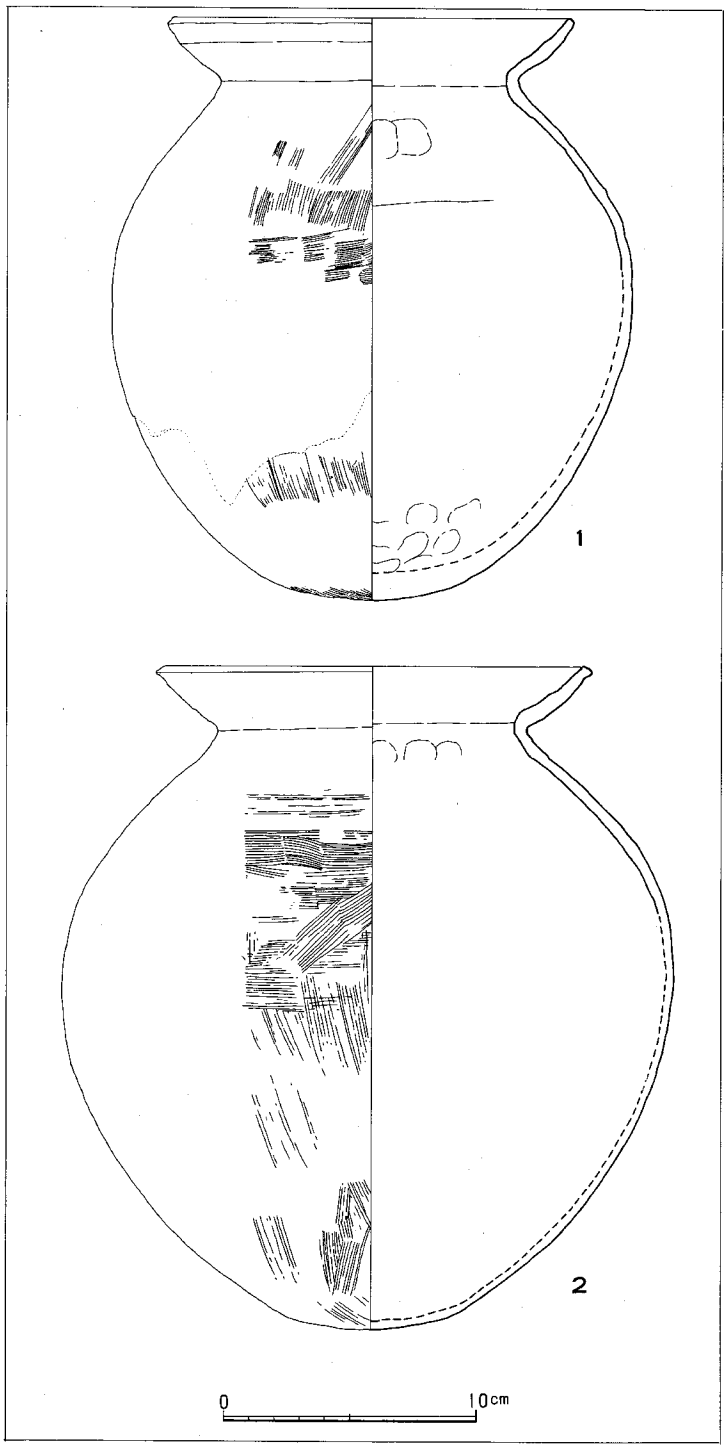



Fig.7　SD01 溝及び土器包含層出土土器実測図(1) (1／3)

は良精、焼成は堅緻である。内外面ともヘラ磨きが施されるが、口縁外面及び脚部内面はナデ調整となっている。10～12は小形丸底壺である。10・11は浅い胴部に外反する口縁部を持つ。10が口径13.0cm、器高 6.2cm、11が口径13.0cm、器高 6.5cmを測る。10は灰褐色から明褐色を呈し、外面に横方向のヘラ磨き、口縁部内面は横ハケ目、それ以下はナデ調整となっている。11は明褐色を呈し、口縁部内外面及び胴部内面はナデ調整、胴部外面はヘラ磨きが施される。10・11とも胎土焼成は良好である。12は外反する口縁に球形の胴部を持つ。口縁部外面及び胴部上半はヘラ磨き、下半はヘラケズリ、口縁部内面はヨコハケ目、胴部内面はナデ調整で一部ハケ目が残る。13は浅い皿状の埦で、全体にヘラ磨きが施されるが外面下半はヘラケズリとなっている。12・13とも茶褐色を呈し、胎土は良精、焼成は堅緻である。

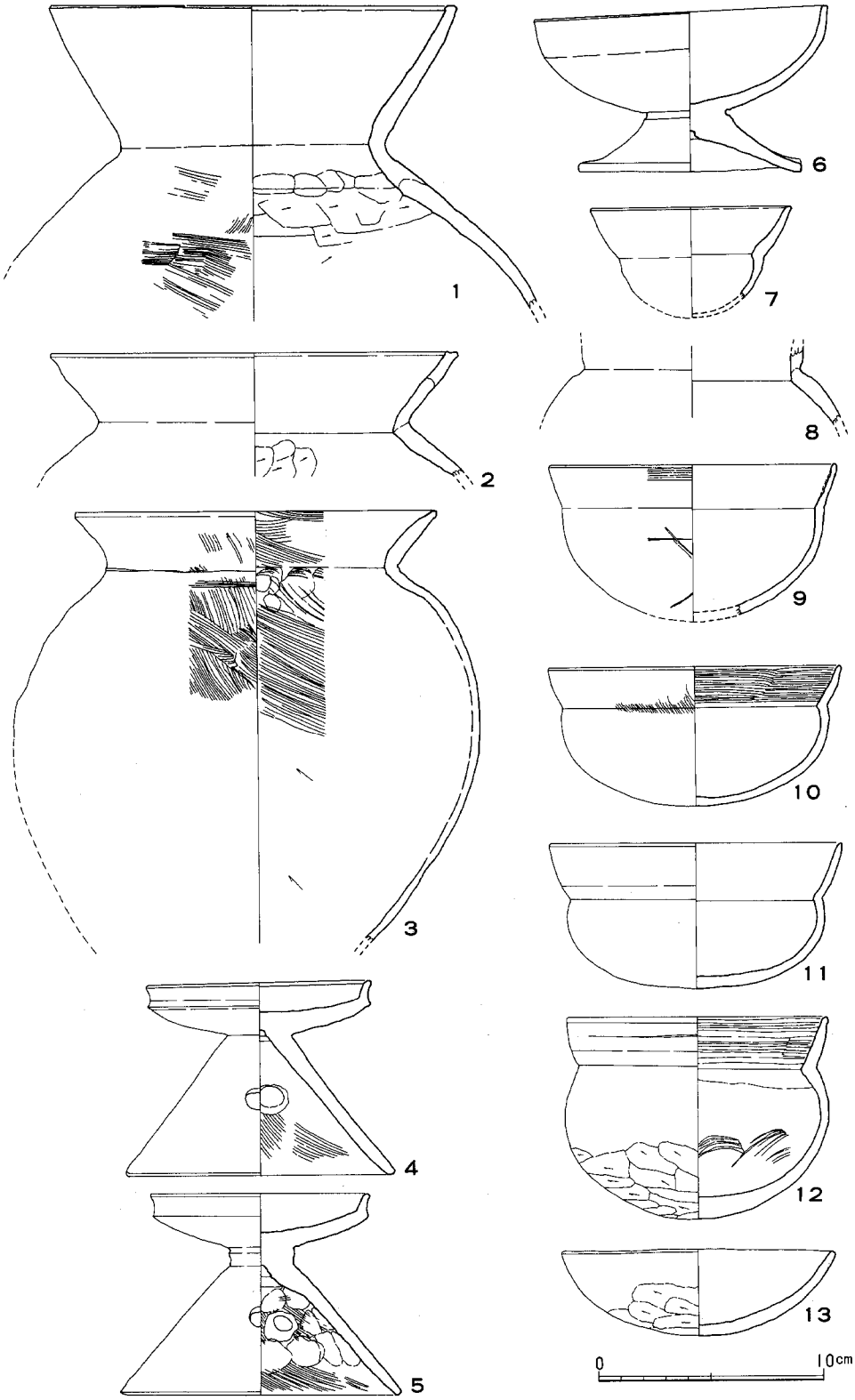



Fig.8　SD01溝及び土器包含層出土土師器実測図(2)（1／3）

# 3　中世期

## (1)　井戸址

調査区内で中世期に属する井戸址５基を検出した。北側に３基、南東隅に２基まとまって分布する。その他、近世・近代の瓦井戸が３基存在する。瓦井戸には近現代の廃棄物が多量に投棄されていた。

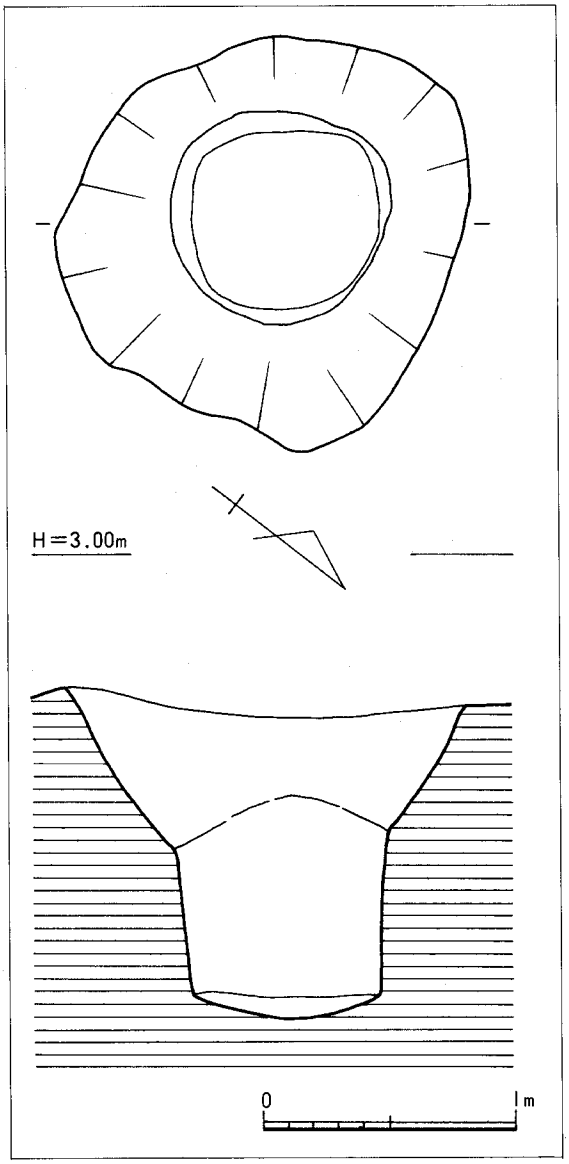



Fig. 9　　SE01井戸址出土状況実測図（1／30）

SE01（Fig. 9　PL. 3）

調査区北側に分布するグループの中で中央部寄りに位置する。上面形は円形に近く、確認面で東西１ｍ70cm、南北１ｍ50cmを測る。掘り方は途中で段を持ち径85cm、底径75cm、深さ１ｍ30cmとなる。出土遺物は白磁碗、皿、壺、滑石製石鍋、施釉陶器、土師器坏などがあり、一部古墳時代の土師器甕や丸底壺の破片が混入していた。

SE02（Fig. 10　PL. 3）

調査区北側東寄りに位置し、SE03を切った形で存在する。東側部分には大きな撹乱坑があり、上面はかなり削平されている。上面形はやや楕円形を呈し長径１ｍ05cm、短径80cm、底径60～65cm、深さ60cmを測る。井筒は桶が使用されていたとみられ、底部の周壁に板状の部材が僅かに残存していた。出土遺物は白磁皿、褐釉水注の注口部、土師器坏などがある。

SE03（Fig. 10　PL. 3）

SE02西側に位置し、SE02によって切られている。上面は撹乱によってかなり削平されているが、大形の掘り方を持つ井戸址である。掘り方は２段になっており、上面径は２ｍ50cmでほぼ円形を呈している。中央部にはさらに径60～65cm、

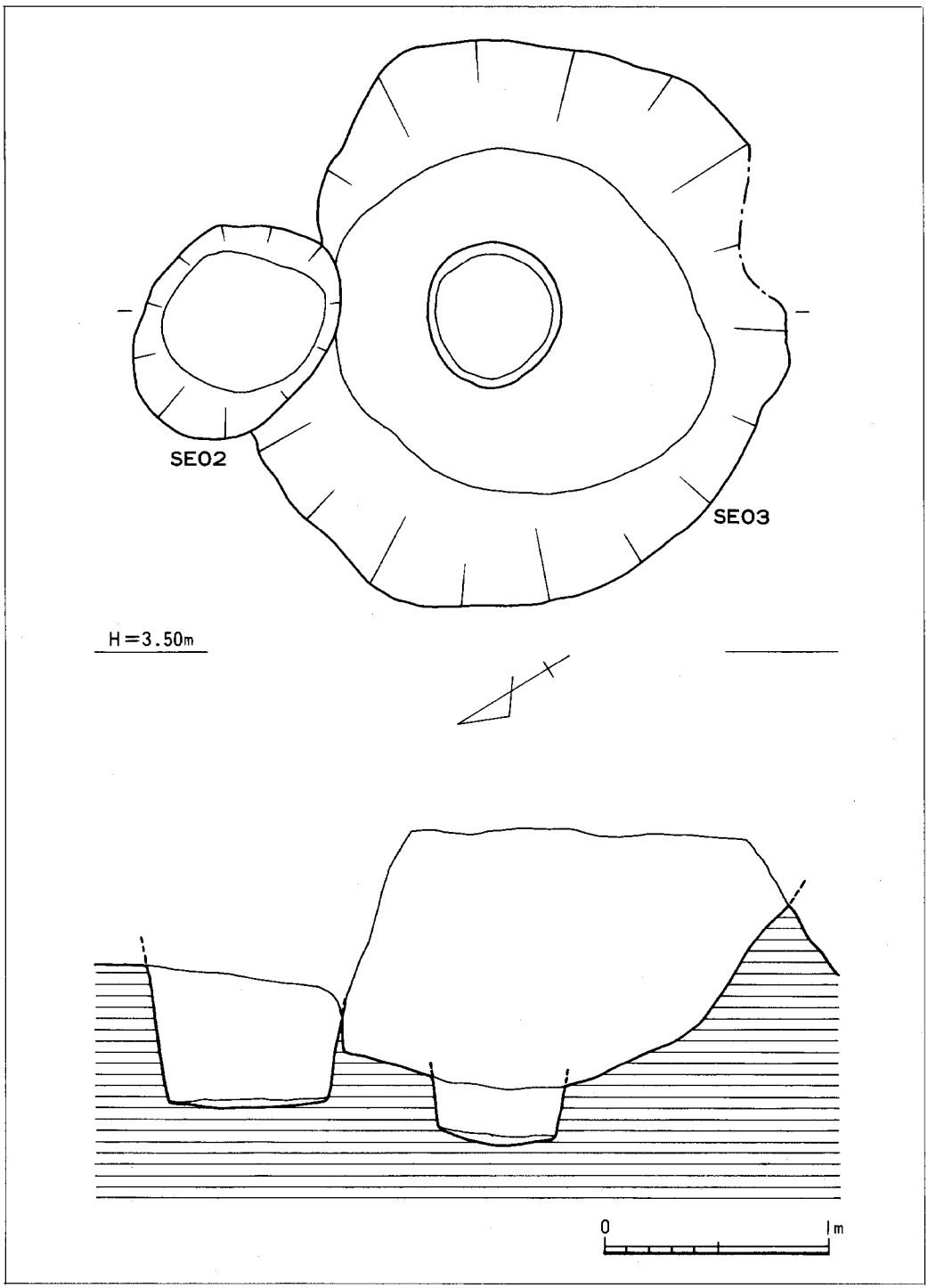



Fig.10　SE02・03井戸址出土状況実測図（1／30）

底径50～55cm、深さ25cmにわたって掘り下げられており、井筒の部分に相当するものと考えられる。井筒は桶とみられ、底部周壁に板材の痕跡が認められた。全体の深さは確認面下１ｍ40cmである。伴出遺物は、白磁碗・皿、青磁皿、施釉陶器、滑石製石鍋片、瓦質土器、土師器坏などがあり、上部には古墳時代の丸底壺や甕、器台、奈良～平安時代の須恵器の杯身・蓋などが出土している。

SE04（Fig. 11　PL. 4）

調査区東南隅に位置し、半分は既設建物の基礎下にはいっており、さらに近代の瓦井戸によって切られていたので、西側半分しか調査できなかった。南北長２ｍ60cm、深さ１ｍ95cmで、上面から途中２段の段を持ち、窄まりながら井筒部へと移行する。井筒部は径35cm、深さ35cmを確認できる。出土遺物は、白磁碗・皿、青磁碗、施釉陶器、滑石製石鍋片、瓦器碗・皿、土師坏・皿などに加え奈良時代の須恵器甕片や坏身・蓋、弥生時代の甕棺片などが混入していた。

SE05（Fig. 11　PL. 4）

ＳＥ04井戸址北側で検出されたもので、上部は撹乱によってかなり削平されている。上面は東西１ｍ05cm、南北１ｍ20cmで、底径75cm、深さ１ｍ35cmを測る。出土遺物は、白磁碗・皿、青白磁、青磁碗・皿、黄釉鉄絵盤、捏鉢、施釉陶器、瓦質土器、土師器坏・皿、布目瓦などがある。その他、主にＫ－１甕棺の破片を含む弥生時代の甕棺片、古墳時代の土師器甕・高坏、奈良～平安時代に属する須恵器坏身・蓋・甕なども出土している。

**出土遺物**

５基の井戸址から、輸入白磁、青磁、施釉陶器類や国産の瓦質土器、土師器、石鍋などが多量に出土した。

**白　磁**（Fig. 12、１～12）白磁碗・皿類である。１は未発達な玉縁口縁を持つ白磁碗である。折返しによって玉縁を形成し、口径16.4cmを測る。胎土は黄白色を呈し、肌理はやや細いが、焼成はあまり良くない。釉調は淡い象牙色となり、不透明釉で貫入がはいる。２は折返しの玉縁口縁をもつ白磁碗で、断面は三角形に近い形となる。口径15.9cm、胎土は灰白色を呈し、きめは細かい。釉は僅かに黄味がかかった白濁色で透明釉となっている。３は口縁端部を外反させる白磁碗である。僅かに黄味がかかった灰白色の胎土を持ち、きめは細かい。釉は不透明な黄味がかった白濁色を呈し貫入が入る。口径15.7cm、薄手作りで体部にわずかな稜を残す。４は断面三角形の玉縁口縁をもつ白磁碗である。口径15.6cm、胎土は灰白色を呈し、肌理はやや細かい。釉は白濁色を呈し不透明釉となっている。外器面には極小さな気泡が多く観察される。焼成は良好。５～８は白磁碗の底部である。５は肉厚の底部で、外底のくりは浅く高台は面取りされている。胎土は灰白色を呈し、きめは少し粗い。やや黄味がかった灰白色の透明釉をかけ、内面は施釉後、一部かき取っている。体部外面は半釉。内面には鋭い沈圏線をめぐらす。６は見込みに段を有し、輪状に釉をかきとる底部片である。胎土は灰色で肌理はやや細かい。

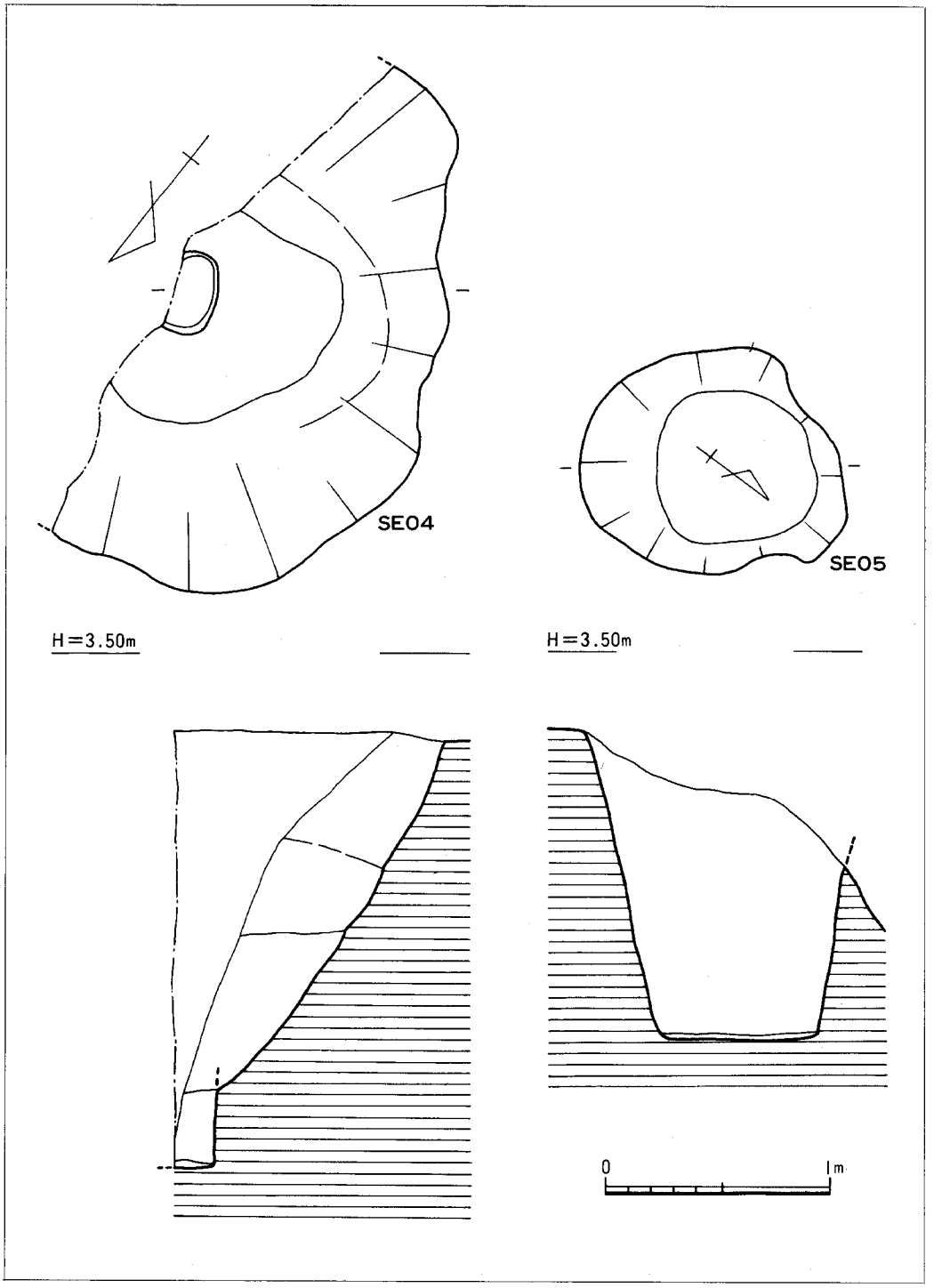



Fig.11　SE04・05井戸址出土状況実測図（1／30）

釉は不透明な淡い緑灰色を呈し貫入をみない。体外下半は無釉。7は内面に沈圏線をめぐらす底部である。胎土はきめ細かく、黄味の強いオリーブ色をした不透明な釉調を呈している。体外面は半釉。外底部は黒く焼けており火を受けた可能性がある。8は、見込みに型押しで花鳥文を表現した白磁碗の底部である。胎土は黄白色を呈し、肌理はやや細かい。黄味がかった白色の透明釉を全面に施釉する。焼成は良好。9～12は白磁皿である。9は口径10.2cm、灰白色肌理細かな胎土に、わずかに黄味がかった灰白色の透明釉をかける。焼成は良好で平底皿になるものと考えられる。10は高台付皿で口径10.4cm、器高 3.0cmを測る。胎土は淡く赤味がかった灰色を呈し肌理は細かい。釉は不透明釉で内面はやや黄味がかった灰白色、体外面は黄褐色を呈し高台近くまで施釉している。見込みの部分は輪状に釉をかき取っている。焼成は不良で2次的な火を受けた可能性がある。11は口径13.4cmの平底皿になる可能性がある。灰白色きめ細かな胎土を持ち、僅かに黄味がかった灰白色不透明釉をかける。体外面に極小さな気泡が観察される。体下半は露胎となる。12は、高台付皿の可能性がありロ径12.3cm、胎土は白味がかった灰褐色を呈し肌理が細かい。釉はくすんだ象牙色で不透明、体外面に気泡が多くみられる。焼成はあまり良くない。

**青　磁**（Fig. 12、13～16）青磁碗と皿である。13は外面に鎬連弁文を持つ龍泉窯系青磁碗である。口径16.6cm、胎土は肌理が細かく灰色を呈し、焼成は良好である。釉は青味を帯びたオリーブ色を呈しガラス質で光沢がある。14は、同安窯系の青磁碗である。灰色の肌理細かな胎土を持ち、淡い青緑色の釉をかける。体外面は半釉。文様は外面が放射線状の櫛描文、内面は見込みに段がつき、体壁に先の細いヘラ状工具で花文を描く。15は高台付皿で口径11.2cm、やや褐色がかった灰白色のきめ細かな胎土を持ち、淡オリーブ色の透明釉をかける。体外面は高台まで施釉する。内面にはヘラ描きと櫛描きで文様を構成する。同安窯系の青磁である。16は同安窯系の平底皿である。口径 9.8cm、器高 2.5cmを測る。胎土は灰褐色を呈しやや粗い。不透明な黄味の強いオリーブ色の釉をかけるが、発色が悪く光沢がない。体外面は半釉となっている。見込みに、櫛状施文具の先端を押し付けたような文様が観察される。

**瓦質土器・土師器**（Fig. 12、17～20）17は瓦質の甕形土器で、口径19.4cm、胎土に砂粒を含むが焼成は堅緻である。灰黒色を呈し、口縁部内外面はヨコナデ、頸部以下外面は格子タタキ、内面はヘラケズリ調整が施される。18は瓦器碗である。口径15.4cm、器高 4.8cmを測る。色調は灰黒色を呈し、胎土は精良、焼成も良好である。内外面ともヘラ磨きが施される。貼り付け高台内側はナデ調整がみられる。19は土師皿である。口径 9.8cm、器高 1.5cmを測る。淡褐色を呈し胎土に微細な砂粒を含む。焼成は良好。内外面ともナデ調整、底部は糸切底になっている。19は土師器坏である。口径14.2cm、灰褐色を呈し、胎土に細かな砂粒を少量含む。焼成は良好。外面はナデ調整、内面はナデ調整の後、ヘラ磨きが加えられている。

**滑石製品**（Fig. 12、21）石鍋である。口径21cm、断面三角のツバが付き、下半はカーボンが厚く付着している。口縁部にはかすかな工具痕が観察される。

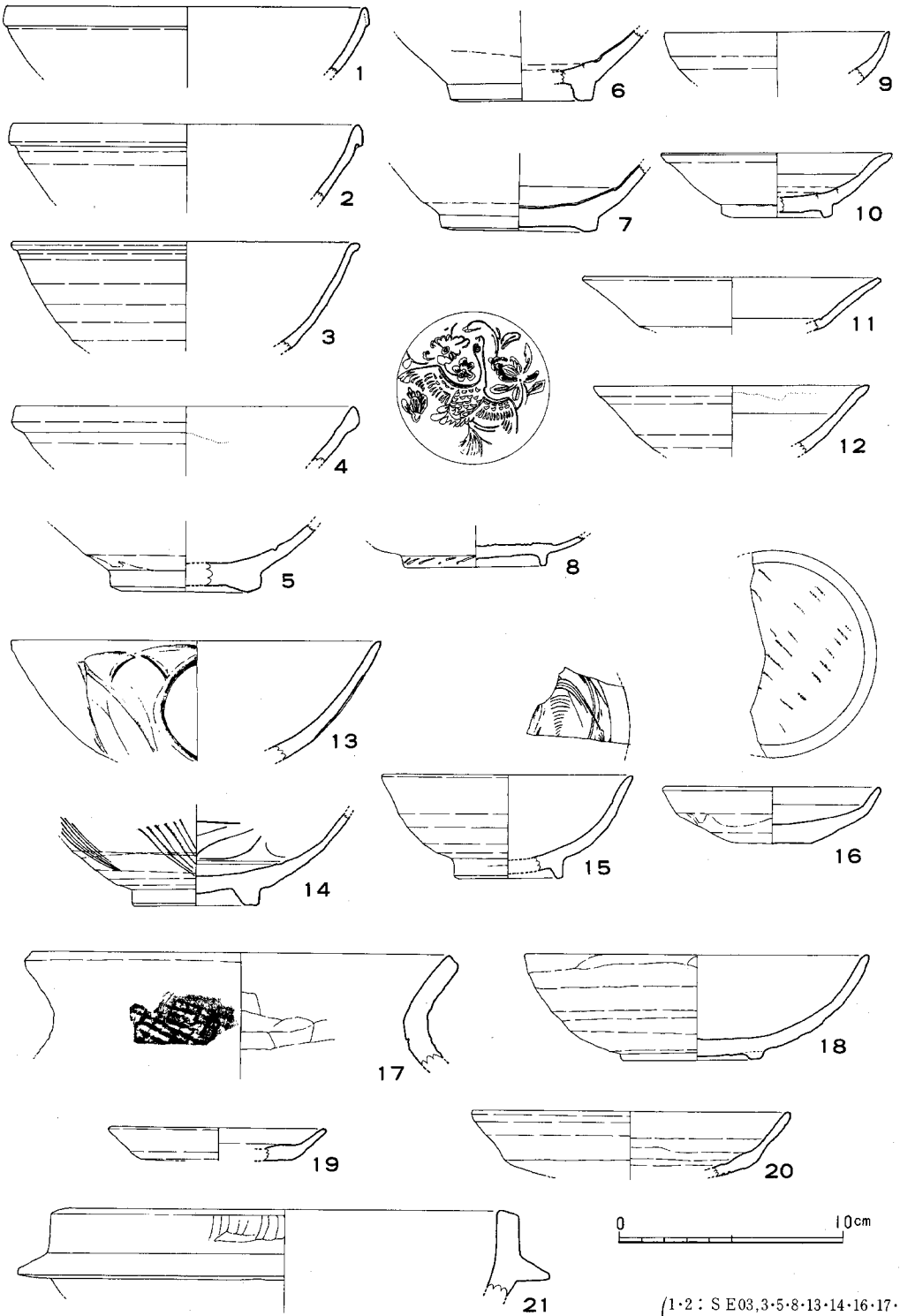



Fig.12　SE01～SE05井戸址出土土器実測図（1／3）

（1・2：SE03,3・5・8・13・14・16・17・19：SE05
4・7・15・18：SE04,6・9・11・12・20・21：SE01
10：SE02）

(2) 土　壙

調査区全体で16基の土壙を検出した。かなり削平が激しくプランの一部しか確認できなかったものも存在する。分布は調査区全体に広がっているが、特に大きな攪乱のある部分は判然としない。出土遺物は主に土師器坏・皿、白磁、青磁、それに伴う陶器類であるが、一部には弥生式土器、古墳時代の土師器、奈良～平安時代の土師器・須恵器なども含まれる。

SK01(Fig. 13　PL. 5)

調査区南端で検出された。平面形は楕円形で、長径1ｍ35cm、短径1ｍ10cm、深さ40cmを測る。土壙は黄白色砂層に掘り込まれ、茶褐色砂質土層が覆土となる。覆土中から土師器坏・皿、白磁碗・皿、青白磁合子、瓦器碗、施釉陶器の他に奈良～平安時代の須恵器坏身・坏蓋などが出土している。

SK02(Fig. 13　PL. 1)

調査区のほぼ中央部に位置する。平面形は円形に近い楕円形で、北側が緩やかな掘り方となる。主軸を南北にとり1ｍ85cm、東西1ｍ55cm、深さ65cmを測る。土壙内からは、白磁碗・皿、青磁碗・皿、黄釉盤、捏鉢、滑石製石鍋片、瓦器碗、施釉陶器、布目瓦などの他に、弥生式土器、古墳時代の土師器甕・小形丸底壺、奈良～平安時代の須恵器坏・蓋などが混入して出土している。白磁碗の中には底部に墨書のあるものが1例ある。

SK03(Fig. 13　PL. 1

調査区南西隅に位置し、SD01を切っている。。西側半分は既設建物の基礎土間コンクリート下になっており、全形は判然としない。確認し得た部分の規模は、径1ｍ50cm、深さ40cmとなる。出土遺物は、白磁碗・皿、青磁碗・皿、黄釉鉄絵盤、捏鉢、施釉陶器、石鍋、土師器坏・皿の他、5世紀初頭の土師器甕、奈良～平安時代の須恵器甕・壺・坏身・蓋などがある。青磁碗の中には底部に墨書のみられるものがある。

SK04(Fig. 13　PL. 1)

調査区のほぼ中央部に位置し、上部を大きな攪乱によって削平されている。方形に近い掘り方で、東西1ｍ10cm、南北90cm、深さ70cmとなる。土壙内からは、白磁碗・皿・瓶、青磁碗・皿、施釉陶器、土師器坏、須恵器坏身・蓋などが出土している。

SK05(Fig. 14　PL. 5)

調査区南側で検出した。平面形は楕円形を呈し、長径1ｍ53cm、短形1ｍ28cmを測る。断面は、皿状に窪み深さ40cmとなる。出土遺物は土師器坏・皿、白磁碗、褐緑釉瓶、捏鉢、青磁皿、施釉陶器、瓦器碗、布目瓦、砥石などがある。その他、周辺部には弥生時代から奈良～平安時代にかけての遺物が分布しており、土壙内からも弥生中期の甕片、5世紀初頭の土師器甕、小形丸底壺、高坏、奈良～平安時代の須恵器坏身・蓋、甕、壺片なども混入した状態で出土している。

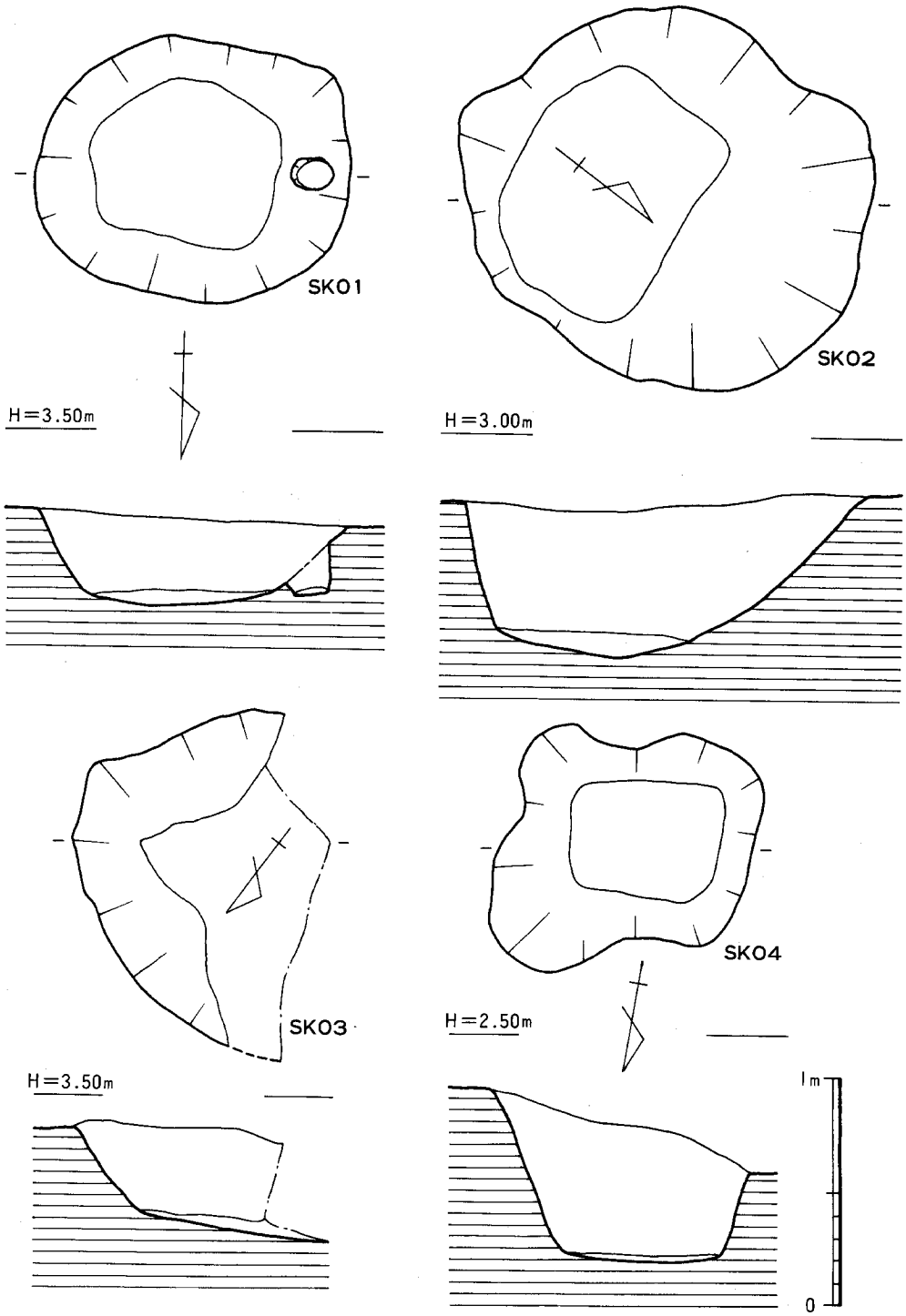



Fig.13　SK01～SK04土壙出土状況実測図（1／30）

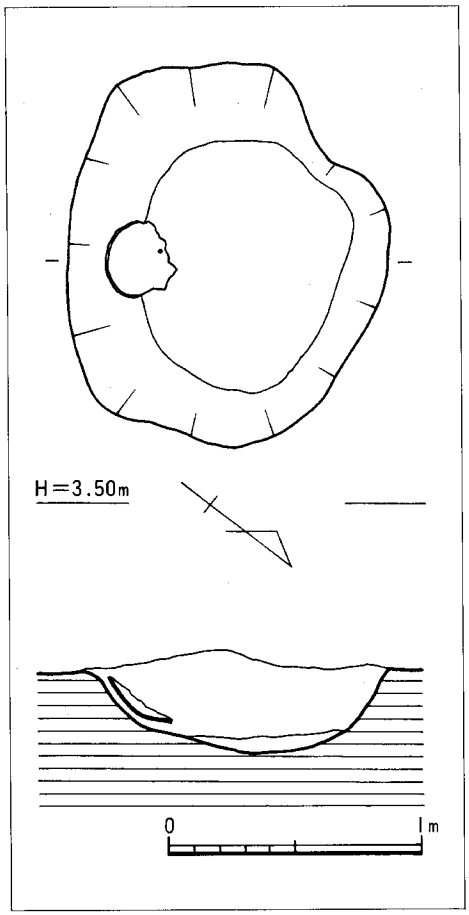



Fig.14　SK05土壙出土状況実測図(1／30)

SK06(Fig. 15　PL. 6)

調査区東側の既設建物基礎近くで発見された。西側の一部をSK07によって切られている。平面形は円形に近く径90cmとなる。上部は著しく削平されており、深さは僅か10cmしか残存していない。出土遺物は、白磁碗(内1点は墨書)・皿、青磁碗、黄釉大盤、褐釉瓶、火舎、須恵質土器、施釉陶器、土師器杯・皿などがある。

SK07(Fig. 15　PL. 6)

SK06の北西側に位置し、SK06の一部を切っている。北西部分は現代の攪乱によってかなり削平されている。長径1m75cm、短径1m65cm、深さ1m03cmを測り、隅丸方形に近い形をとる。土壙内からは、青磁碗・皿・水注、白磁碗・皿・壺、青白磁合子、黄釉鉄絵大盤、褐緑釉瓶・鉢・壺、灰緑釉甕、瓦器碗、布目瓦、陶器、土師器坏・皿などが出土し、弥生式土器、5世紀初頭の甕、小形丸底壺、奈良～平安時代の須恵器坏・蓋・甕なども出土している。

SK08(Fig. 2　PL. 1)

調査区南西隅で検出されたが、大部分は基礎コンクリートの下になっているため全容はわからない。一部SD01を切っており、東側は攪乱によって削平されている。出土遺物は少量であるが、青磁碗、土師器坏、須恵器坏・壺・甕、布目瓦、古墳時代の土師器甕などがある。

SK09(Fig. 2　PL. 1)

調査区中央部、SK04の東側に位置する。かなり削平を受けており、辛うじてプランを確認するにとどまった。西側は現代の攪乱によって切られ、長さ1m20cmを測る楕円形の土壙である。出土遺物には、黄釉鉄絵盤、白磁碗、青磁碗、土師器坏・皿、須恵器坏身・蓋・甕・高坏、瓦質土器、布目瓦、陶器などがある。

SK10(Fig. 16　PL. 6)

調査区南西隅で検出した。南側部分が既設建物の基礎下になっているが、大形の楕円形を呈する土壙と考えられる。確認できる部分の規模は、長径2m60cm、短径2mで、断面は皿状に窪み、深さ50cmを測る。遺物は弥生中期の丹塗り鉢が完形で混入していたが、主に土師器坏・

皿、白磁碗・皿・壺、青磁皿などが主体を占め、その他、捏鉢、施釉陶器、瓦器碗、奈良時代の須恵器坏、古墳時代の土師器甕などが含まれる。

SK11

(Fig. 17　PL. 1)

SK02東側に位置する。小形で楕円形を呈し、北側の一部はコンクリートパイルによって壊されている。長径95cm、短径78cm、深さ45cmを測る。

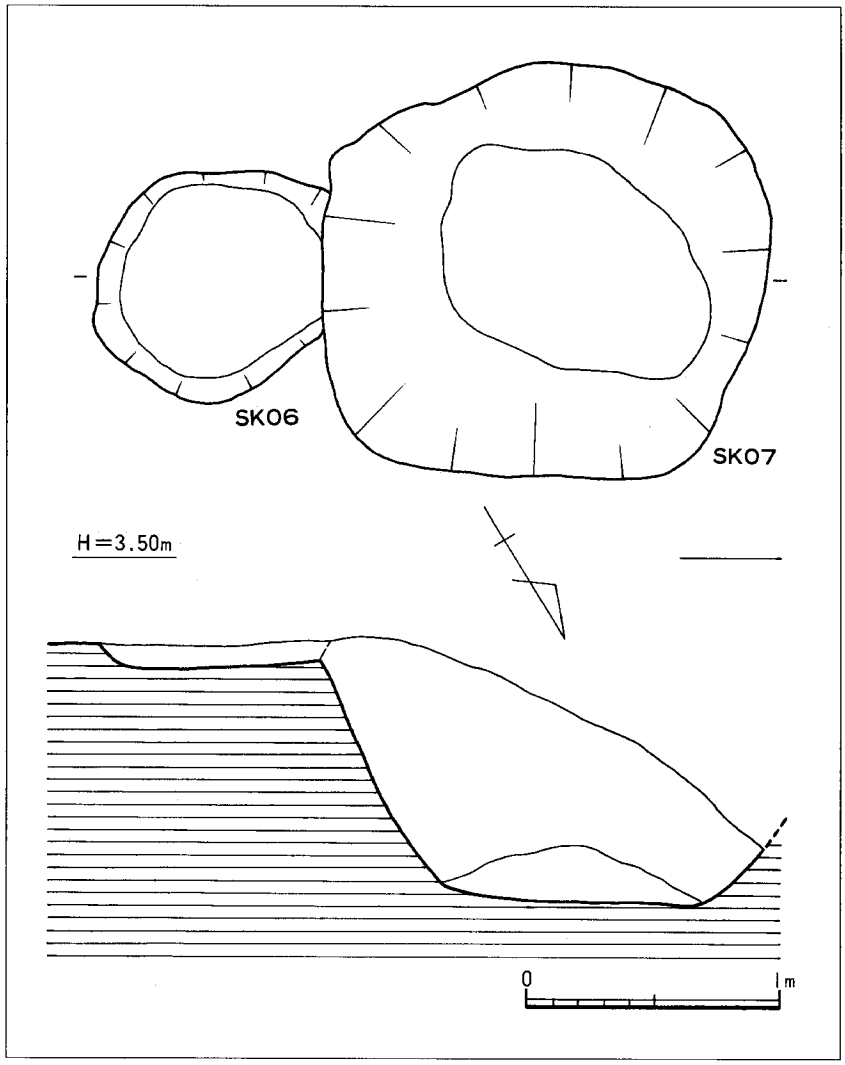



Fig. 15　SK06・07土壙出土状況実測図 (1／30)

遺物は少なく、底部に墨書のある白磁碗、青磁皿が僅かに出土しているにすぎない。

SK12(Fig. 2　PL. 1)

調査区北側で検出したが、著しく削平を受けており、底の一部しか確認できなかった。長径1m20cmで、楕円形を呈するものと考えられる。土壙内からの遺物の出土はないが、周辺から青磁碗が出土している。

SK13(Fig. 2　PL. 1)

調査区北側寄りに位置し、SK16に切られた不定形土壙である。全体に削平が激しく、西側は攪乱によって壊されている。出土遺物は、白磁碗・皿・壺、青白磁皿、青磁碗、瓦器碗、火

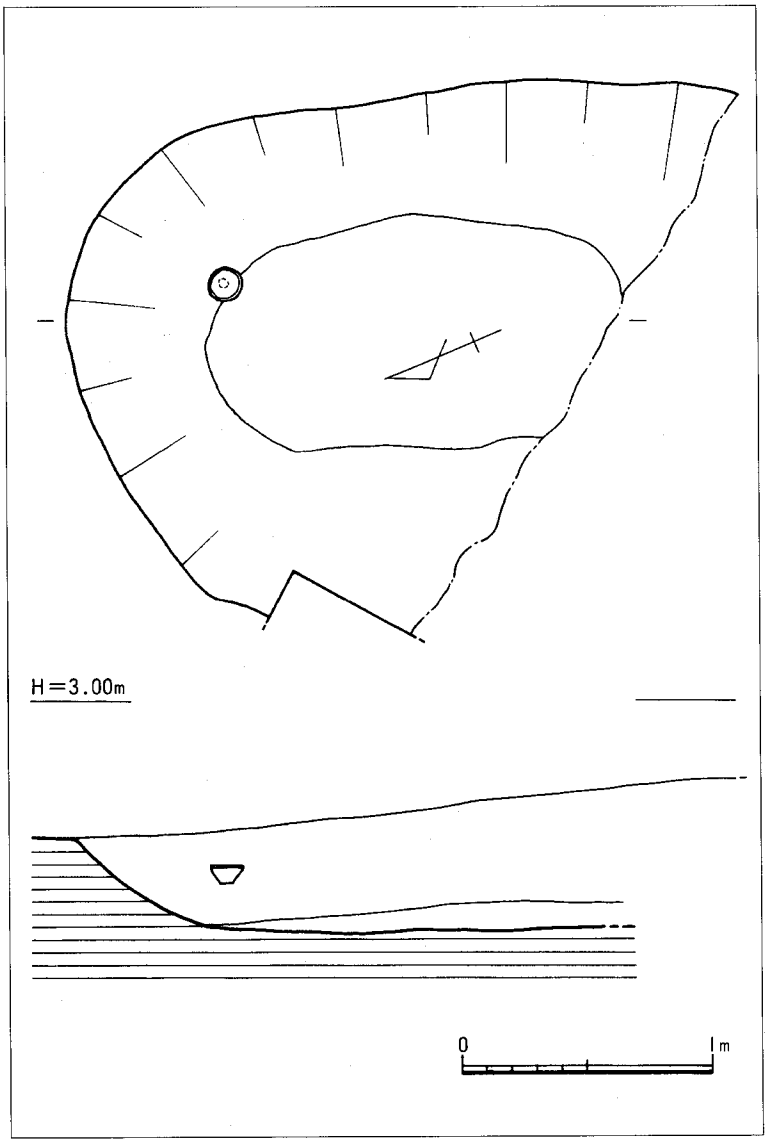



Fig.16　SK10土壙出土状況実測図（1／30）

舎、施釉陶器、黄釉鉄絵盤、茶緑釉甕、土師器坏・皿などの他に、古墳時代の土師器甕、奈良～平安時代の須恵器坏身・蓋・甕などがある。

SK14（Fig. 2　PL. 1）

SK13の北側に隣接する不定形土壙で、SK03、現代の攪乱などによって大きく削平されている。土壙内からは、白磁碗、青磁碗、土師器坏、施釉陶器、奈良時代の須恵器坏、古墳時代の土師器甕・高坏・小形丸底壺などが少量出土している。

SK15（Fig. 2　PL. 1）

調査区北側に位置するが、削平が激しくプランを充分摑み得なかった。出土遺物は、土師器の甑把手、甕、小形丸底壺、高台付坏、須恵器坏身・蓋、甕などの古墳時代から奈良～平安時代の遺物を含め、白磁碗、青磁碗・水注、滑石製石鍋、土師器坏・皿、瓦器碗、施釉陶器などがある。

SK16（Fig. 17　PL. 1）

SK13を切った状態で検出された。上面形は円形に近く径1m15cm、深さ45cmを測る。土壙内からは、青磁碗、白磁碗、灰緑釉甕、擂鉢、布目瓦、須恵器坏・甕、土師器坏・甕などが出

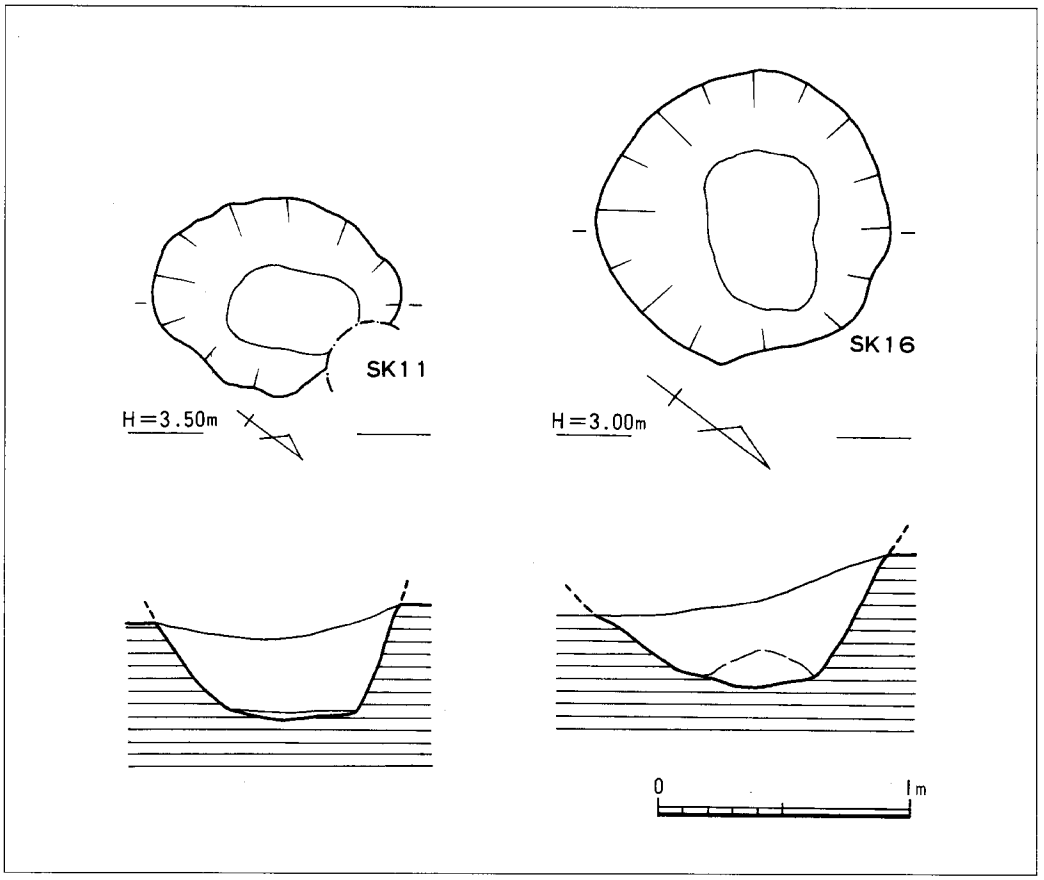



Fig.17　SK11・SK16土壙出土状況実測図（1／30）

土している。

出土遺物

16基の土壙から、白磁、青磁、青白磁、褐釉陶器、黄釉盤、雑釉陶器などの輸入陶磁器類、国産の土師器、須恵器、瓦質土器など、これまで博多遺跡群で発見されている各種の陶磁器類が多量に出土している。

**白　磁**（Fig. 19、1～19、Fig. 20、1～14）図化できるのは殆ど白磁碗と皿である。1・3は未発達な折返しの玉縁をなす。1は口径13.3cm、白色のきめの細かい胎土を持ち、焼成は良好である。全体に黄味を帯びた透明な釉をかける。3は口径15.6cm、胎土は灰白色を呈し肌理はやや細かい。僅かに黄味がかった透明の灰白色釉をかけ、体外面は半釉となる。焼成は良好である。2・4～9は断面三角形に近い折返し玉縁口縁の白磁碗である。2は口径14cm、きめの細かい灰白色の胎土を持ち、ガラス光沢のある透明な淡いオリーブ色の釉をかける。体外

面は半釉。焼成は良好で堅緻である。4は口径15.8cm、黄白色のややきめ細かい胎土を有し、くすんだ象牙色の不透明釉をかける。体外面には気泡が多く、貫入が認められる。5は口径15.0cm、胎土は灰色を呈し、肌理はやや細かい。僅かに黄味がかった不透明な灰白色釉を施し、体外面は半釉となる。見込みに沈圏線が認められる。6・7は共に口径16.2cm、黄白色のきめのやや粗い胎土を有し、くすんだ象牙色の不透明釉をかける。体外面は気泡が多く、半釉となっている。8は、ガラス質の極淡いオリーブ色の透明釉をかけた白磁碗で、胎土はきめ細かい灰白色を呈し、焼成は堅緻である。口縁上端には重ね焼きのため砂粒が付着している。体外半釉、口径は19.2cmである。9は完形に近い形で、口径17.0cm、器高 7.1cmを測る。胎土はきめ細かいやや黒灰色を帯びた象牙色を呈し、象牙色の不透明釉をかける。体部外面は半釉となる。高台は浅く、面取りされ、内面に沈圏線が廻る。10～13は玉縁口縁の底部である。10は灰白色の肌理細かい胎土に、やや黄味を帯びたガラス質の灰白色釉をかける。体外面は半釉。11は、灰白色のきめ細かい胎土に、僅かに青味を帯びた白濁色の不透明釉をかける。体外面は半釉、外面にやや大きめの気泡が認められる。12は、灰白色の肌理細かい胎土を有し、釉調は淡緑がかった透明な灰白色を呈する。体外面は高台まで施釉する。内面に気泡が多く認められる。13は焼成不良で、胎土は肌理が粗く、淡黄褐色を呈し、底部付近は赤褐色を呈する。釉は灰色がかった象牙色を呈し不透明釉となっている。体外面は半釉で、気泡が多い。内面の見込み部分は輪状に釉を掻き取る。器面調整が粗雑で器壁のヘラ削り痕が顕著にみられる。

14～19は外反する口縁端部を水平に調整する白磁碗である。14・15は灰白色を呈する肌理細かい胎土で、僅かに黄味がかった灰白色の透明なガラス質の釉をかける。口径は14が15.8cm、15が17.0cmを測る。共に焼成は良好で堅緻である。16は口径16.8cm、器高 6.7cmを測り、淡い象牙色をした肌理のやや細かい胎土を有する。焼成はあまり良くなく、釉はくすんだ象牙色を呈し不透明である。釉のかかり具合が不均等で、厚い部分とうすい部分があり、体外面には大きな気泡が多い。見込みの一部には釉がかかっていない。体外面は半釉で器面調整が雑である。内面に沈圏線を施す。17は、黄味がかった灰白色の胎土で肌理はやや細かい。口径16.5cm、黄味がかった白濁色の不透明釉をかけ、気泡が多くみられる。18は口径15.3cm、やや肌理細かい灰白色の胎土で、釉はやや黒味を帯びた灰白色の不透明釉である。かかり方にムラがあり、体外面は気泡が多い。19はやや黄味の強い象牙色の胎土を持ち、きめは細かい。釉は半透明の象牙色を呈し、体部外面に気泡が多く、貫入がみられる。Fig. 20、1は口縁端部を外反させ水平に切るタイプの白磁碗である。口径17.3cm、きめの細かい灰白色の胎土で、淡いオリーブ色の透明なガラス質の釉をかける。体部外面は片切彫の縦線、口縁下に沈線をめぐらし、その下に6本単位の櫛描文を施文する。焼成は良好で堅緻である。2～9は高い高台をもつ白磁碗底部である。2は灰白色でやや肌理の細かい胎土を持ち、僅かに青味がかった灰白色半透明の釉をかける。焼成は良好で内面に沈圏線がみられ、外面はトビガンナ風の削り痕が観察される。3

は肌理の細かい白濁色の胎土を有し、僅かに青味がかったガラス質の透明釉を高台までかけている。焼成は良好で堅緻である。4は僅かに赤味がかった象牙色の胎土を有し肌理が粗い。焼成は悪く、釉調はやや赤味がかった黄白色を呈し不透明。体外面は高台まで施釉し、気泡が極めて多い。内面に沈圏線をめぐらし、その中に櫛描文で四巴状に文様を描く。5も4同様内面に沈圏線をめぐらし、その中に櫛描文で四巴状に文様を描く。胎土はきめの細かい灰白色を呈し、やや黄味がかった灰白色のガラス質透明釉を高台まで施釉する。焼成は良好で堅緻である。6～9は外底面に墨書が認められる。6は白色で肌理の非常に細かい胎土をもち、やや青味がかった白色半透明の釉をかける。体部外面は高台まで施釉し、見込みは輪状に釉を掻き取っている。焼成は良好で堅緻である。外底面に赤色で「+」の文字が書き込まれている。7はきめのやや粗い灰白色の胎土を持ち、僅かに青味がかった乳白色の不透明釉を比較的厚目にかける。体部外面は半釉。高台は高く内面を斜めに削り出す。その中に「丁綱」の「綱」と読める墨書が認められる。8は外底面に「王□」と読める墨書がある。きめの細かい灰白色の胎土を有し、僅かに青味がかった乳白色を呈する半透明釉をかける。体部外面は半釉で、見込み部分は輪状に釉を掻き取っている。焼成は堅緻である。9は肌理の細かい灰白色の胎土を持ち、淡いオリーブ色の透明釉をかける。体部外面は半釉、内面は重ね焼きのため見込みの釉を輪状に掻き取っている。外底面に「丁綱□」の墨書が認められる。

10～14は白磁皿である。10は口径14.3cm、器高 3.9cmを測る。肌理のやや粗い灰色の胎土を有し、極淡いオリーブ色の透明釉をかける。体部外面は気泡が多く、高台まで施釉する。内面高位に沈圏線をめぐらし、見込みに櫛描文を施す。見込み中央付近には砂粒が付着する。焼成は良好である。11は僅かに灰色がかった肌理細かい胎土を持ち、極淡いオリーブ色のガラス質透明釉をかける。焼成は堅緻で体部内面に沈圏線を有する。高台付皿になるか。口径10.8cm。12は平底皿で口径11.7cm、器高 2.4cmを測る。きめの細かい灰白色の胎土を有し、淡いオリーブ色の透明釉をかける。体部外面は半釉となる。口縁部はやや内弯気味に立ち上り、内面に沈圏線をめぐらす。焼成は良好である。13は口径13.8cm、胎土は灰色を呈し、きめは細かい。釉は淡いオリーブ色を呈し、透明釉となる。体外面に微細な気泡が多く見られるが、焼成は堅緻である。高台付皿になるか。14は口径15.6cm、肌理のやや細かい灰白色の胎土を持ち、淡いオリーブ色の半透明釉をかける。口縁内面に沈線を有し、体部内面は削り込んで段を有する。

**青　磁**（Fig. 20、15・16、Fig. 21、1 ～4 、7 ～9 ）Fig. 20、15・16は龍泉窯系青磁碗である。15は口径16.2cm、器高 7.0cmを測る。肌理細かい灰色の胎土を有し、釉は青味がかった灰緑色となる。やや不透明釉で外面に気泡が少々入る。釉は高台まで施され、一部畳付までかかる。焼成は良好である。体部内面には2本の片切彫沈線で花弁状に5区分し、それぞれに片切彫で雲文を描く。外部に墨書のあとらしいものが見られるが判然としない。16は口径16.8cm、きめの細かい灰色の胎土を有し、釉調は青味の強い淡オリーブ色で、ガラス質透明釉とな

る。内面には片切彫で蓮花折枝文を施文する。焼成は良好である。Fig. 21、1・2も龍泉窯系青磁である。1は口径12.3cmの小ぶりの青磁碗である。きめ細かい灰色の胎土を持ち、オリーブ色を呈する透明ガラス質の釉をかける。体部外面は片切彫で蓮弁を描き、その上から櫛描線文を施す(脈入蓮弁)。内面は片切彫の蓮花文と櫛描文を組み合わせる。焼成は良好である。2は碗底部で、胎土は灰色を呈し肌理細かい。釉調は青味を帯びたオリーブ色で、透明なガラス質となる。釉は厚くかけられ、高台から外底部に迄及んでいる。焼成は良好で畳付に一部砂粒が付着している。

3・4は龍泉窯系の青磁皿である。3は口径 9.9cm、器高 2.5cmを測る。灰白色を呈する肌理細かい胎土をもち、青味がかった緑灰色の釉を施す。透明なガラス質で、全面に施釉した後、底部の釉を削り取っている。見込み部分と体部外面下半の釉はかなり厚い。焼成は良好で、見込みに刻劃花文を施文する。4は口径11.0cm、器高 1.8cmで、口縁はやや外反し、体部は屈曲して稜を作る。胎土はきめの細かい灰色で、焼成は良好。釉は透明なガラス質でオリーブ色を呈する。外底部はやや窪み釉を削り取る。釉のかかり方は均等ではなく、見込み部分と外底部付近は特に厚い。見込みには片切彫で蓮花文を描く。

7～9は同安窯系の青磁碗である。7は口径15.7cm、きめ細かい灰色の胎土を有し、オリーブ色を呈したガラス質透明釉をかける。体部外面には片切彫の縦線文を刻み、口縁上端には目跡を残す。焼成は良好である。8は、7同様体部外面に片切彫で縦線文を施文する。胎土は肌理細かい灰褐色を呈し、黄味がかったオリーブ色の不透明釉をかける。口径16.9cm。9は口径18.1cm、やや肌理の細かい灰色の胎土を持ち、黄味がかったオリーブ色の半透明釉をかける。器表には茶褐色の斑点が入り、大きな気泡がある。焼成は良好である。

**青白磁**（Fig. 21、5・6）5は合子である。きめ細かい白色の胎土に淡青白色の透明釉を施す。6は輪花の青白磁皿で、白色の肌理細かい胎土に、やや青味がかった透明なガラス質の釉をかける。破片が小さいため、傾き及び口径は判然としない。5・6共焼成は良好で堅緻である。

**褐釉陶器**（Fig. 21、10・17）10は褐釉の壺で、短く外反する口縁部を持つ。胎土は比較的きめ細かで淡茶褐色を呈し、僅かに緑色がかった茶褐色の不透明釉をかける。焼成は良好で光沢がある。口縁内面は重ね焼きのため白っぽい土が付着している。口径13.5cm。17は褐釉の平鉢である。口径23.8cm、胎土に微細な砂粒を含み、赤褐色から灰褐色を呈する。釉は濃い緑色を帯びたオリーブ色で不透明。内面は火の当り方が悪かったのか、気泡が多く光沢が全くない。

**黄釉陶器**（Fig. 21、11）11は磁灶窯系の黄釉盤である。粗大な砂粒を多量に含む胎土は極めて粗い。灰褐色を呈し焼成は良好である。釉調は黄味の強いオリーブ色で、下に鉄彩が認められる。口縁外面は屈曲部付近まで釉が施される。全体の器形は頸部でくびれ、外反する幅広の口縁部を持つタイプと考えられる。

**須恵器**（Fig. 21、12）12は口径20.3cmの甕である。外反する口縁端部下に小さな三角突帯を付す。口縁部内外面はナデ調整、内面はかすかな青海波がみられる。時期的には８世紀代に属し、土壙に混入したものであろう。

**土師器**（Fig. 21、13～16）13は土師皿である。口径9.0cm、器高1.8cmを測る。黄灰色～灰色を呈し、胎土は良精、焼成も堅緻である。器形が少し歪つで丸底気味になる。調整はヨコナデの後、内外面とも簡単なヘラ磨きが施されている。14、16は坏である。14は口径13.1cm、器高 3.1cm、赤褐色を呈し胎土は精良、焼成も良好である。内外面ともナデ調整が施され、底部はヘラ切りである。16は口径14.6cm、器高 3.7cm、赤褐色を呈し胎土にやや砂粒を含む。焼成は良好。内外面ともナデ調整、底部はヘラ切りした後ナデ調整が加えられている。15は高台付坏で口径17.1cm、器高 3.6cmで高台部分が 1.7cmある。淡褐色を呈し、肌理の細かい胎土を持つ。焼成は良好である。内外面ともナデ調整が加えられている。

**瓦質土器**（Fig. 21、18）口径35.0cmの大甕である。灰黒色を呈し胎土に少量砂粒を含むがきめ細かい。焼成は良好。全体の器形は知り得ないが内弯する丸味のある口縁部を持つ。外面はヨコナデ、内面は口縁部がヨコナデ、頸部がヘラナデ、胴部は同心円のタタキとなっている。

### (3) 撹乱層の出土遺物

調査区は－２ｍ以上の撹乱を受けており、溝、井戸址、土壙など遺構以外の撹乱層から遊離した状態で多量の遺物が出土している。重要な遺物も含まれているので、一部参考資料として報告しておきたい。

**青　磁**（Fig. 21、１～３）１は、龍泉窯系の青磁碗である。肌理の細かい灰褐色の胎土を有し、焼成は良好である。釉はオリーブ色を呈し、透明でガラス質となっている。全体に釉が厚くかけられ良質である。口縁端部は輪花状に切り込みを入れ、内面は２本単位の片切彫で内面を分割する。口径14.1cmを測る。２は口径14.8cm、器高 6.0cm、底径 6.6cmを測る。白色砂粒を含むやや粗い胎土を持ち、全体に淡緑色の透明な釉をかける。外面はヘラ削りの稜が残り、外底面には円形に目跡が残る。見込みには沈圏線をめぐらし、内面には砂状の粒子が多数沈着している。粗い作りの青磁碗である。３も青磁碗であり、口径15.8cm、器高 6.1cm、底径 5.1cmを測る。胎土は淡灰色を呈しやや砂粒を含む。釉調は淡緑色で透明である。体部外面は半釉。内外面とも釉のかけむらがあり、厚いところは貫入が激しい。内面には沈圏線がめぐり、外面にはヘラケズリ調整痕をよく残す。割と粗雑な作りの碗である。

**白　磁**（Fig. 21、４～９）４は白磁水注の口頸部である。口径9.3cm、口頸部長7.0cmを測る。やや肌理の細かい灰白色の胎土を持ち、焼成は堅緻である。淡いオリーブ色の透明釉を施し、口頸部内面にも施釉する。口縁部は外反し端部を上下に引き伸ばす。頸部外面に３条、内面に２条の沈線をめぐらす。把手は幅 2.0cm、厚さ 6.5mmの扁平なもので、頸部中央から口縁

部に接して立ち上り、弯曲して肩部に接着するものと考えられる。丁寧な作りの水注である。5～7は白磁皿である。5は高台付皿で、口径10.5cm、器高 2.8cm、底径 4.3cmを測る。きめ細かい灰白色の胎土を有し、焼成は良好で堅緻である。釉は淡いオリーブ色の透明釉で、体部外面は半釉となる。一部高台までかかっている部分もある。口縁部は外反し肥厚する。内面には沈圏線を一条めぐらす。6は平底皿である。口縁端部を斜めに切り落し、厚い底部を持つ。きめの細かい灰白色の胎土を有し、焼成は良好である。僅かに黄味がかった灰白色の透明釉をかけ、施釉後、外底部は削り取っている。体部内面を削り、見込みに沈圏線をめぐらす。7も6同様平底皿であるが、口縁部がやや内弯気味に立ち上る。口径 9.6cm、器高 2.7cmを測る。やや肌理の細かい淡い灰褐色の胎土を有し、僅かに褐色がかった灰白色不透明釉をかける。体部外面は半釉となる。内面には沈圏線を一条廻らす。8は折返し玉縁口縁を持つ白磁碗である。口径16.2cm、器高 6.3cm、底径 6.6cmを測る。割と肌理細かな淡灰色の胎土を有し、不透明な白濁色の釉をかける。体部外面は半釉となる。内面に沈圏線を一条めぐらす。9は外反する口縁端部を水平に切るタイプの白磁碗である。口径17.4cm、器高 7.4cm、底径 6.4cmを測る。きめ細かい灰白色の胎土を有し、淡いオリーブ色の透明釉をかける。体部外面は高台まで施釉される。高台は細くて高く、内側を斜めに削り出す。内面には櫛描文で文様を描く非常にシャープな作りの白磁碗である。

**青白磁**（Fig. 21、10・11）10は合子の身で口径7.3cm、器高3.9cmを測り、やや大きめの器形をとる。胎土は白色を呈し、肌理はごく細かい。焼成は良好で、淡青白色ガラス質透明釉をかける。釉は内面にもかかっているが、蓋受け部は露胎となっている。体部外面は型押しで蓮弁状に成形されている。11は合子蓋で、口径 5.3cm、器高 1.5cmを測る。型押しで花文を表現する。胎土は白色を呈し、きめは細かい。焼成は良好で、淡い青白色の透明釉をかけるが、口縁部内面は露胎となっている。

**褐釉陶器**（Fig. 21、12～14）12は壺である。口径11.1cm、口縁部はやや内傾しながら立ち上り、端部は外に折り曲げて玉縁状となる。胎土は灰褐色を呈し、砂粒を含み肌理はやや粗い。焼成は良好で、茶オリーブからオリーブ色に近い釉を外面にかける。肩部には一条の沈線がめぐり、重ね焼きの目跡が数箇所残る。13は四耳壺である。口径17.8cm、口縁部は体部から直に立ち上り、端部を折り曲げて外傾させる。胎土は径 0.5mm程度の砂粒を多く含み粗い。焼成は良好で、淡いオリーブ色の不透明釉を外面及び口縁内面にかける。肩部には四箇所に幅1.4cm、厚さ 0.6cmの耳を貼付し、その上から垂れ流れる鉄彩を施す。14も四耳壺と考えられる。茶褐色を呈する比較的肌理細かい胎土をもち、濃いオリーブ色の釉を全体にかける。施釉した後、口縁上面部分は粗くふきとる。口縁径 9.2cm、端部を折り曲げて肥厚させる。

その他、図示できなかったが、褐釉陶器の壺外底面に「＋」の墨書が認められるものや、黄釉陶器の大盤なども出土している。

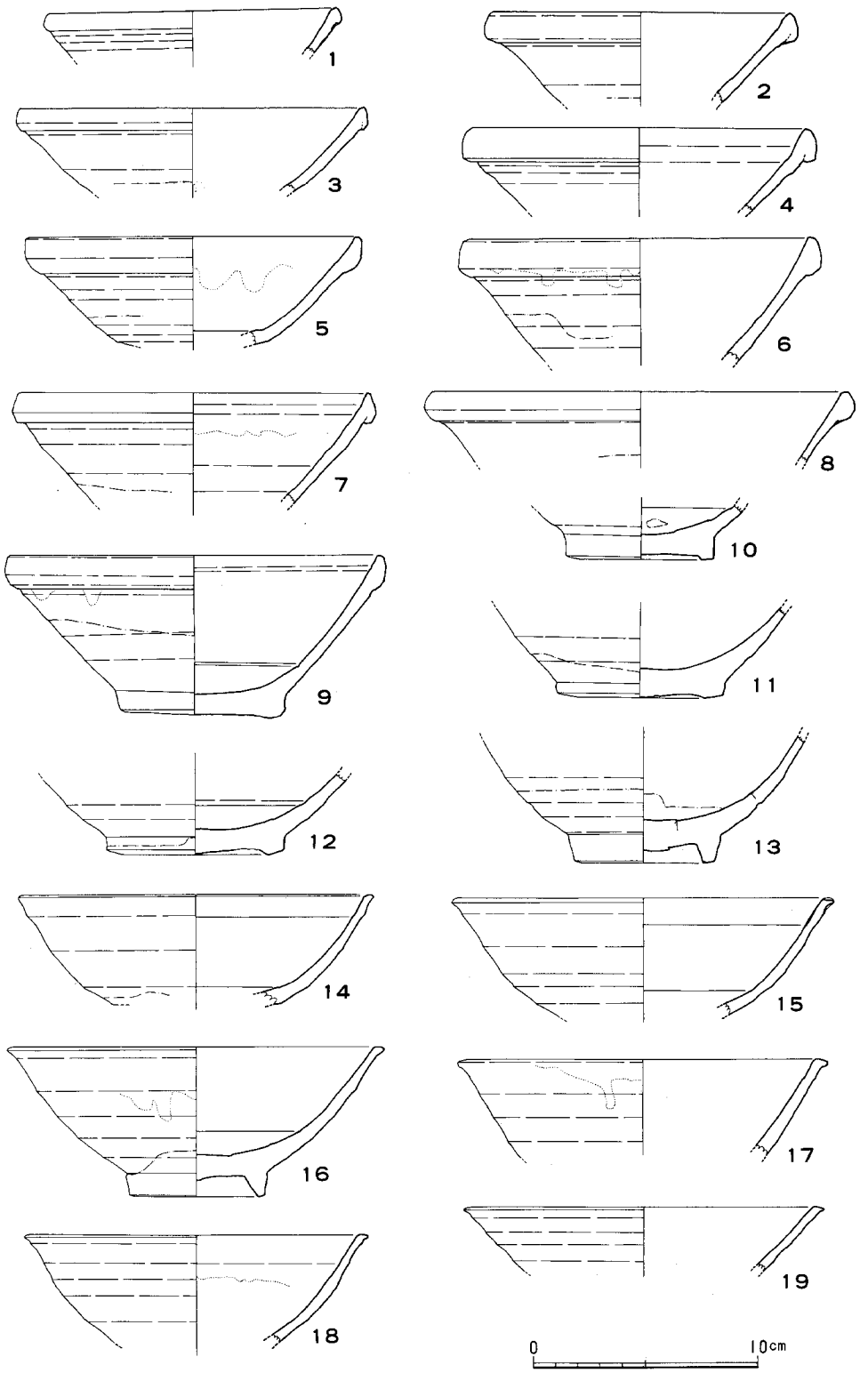



Fig. 18　土壙出土遺物実測図 (I) (1/3) (1・11：SK15　2・9・18・19：SK02　3・10：SK06
4：SK07　5・7・13：SK03　6・15：SK10
8・12・16・17：SK04　14：SK13)

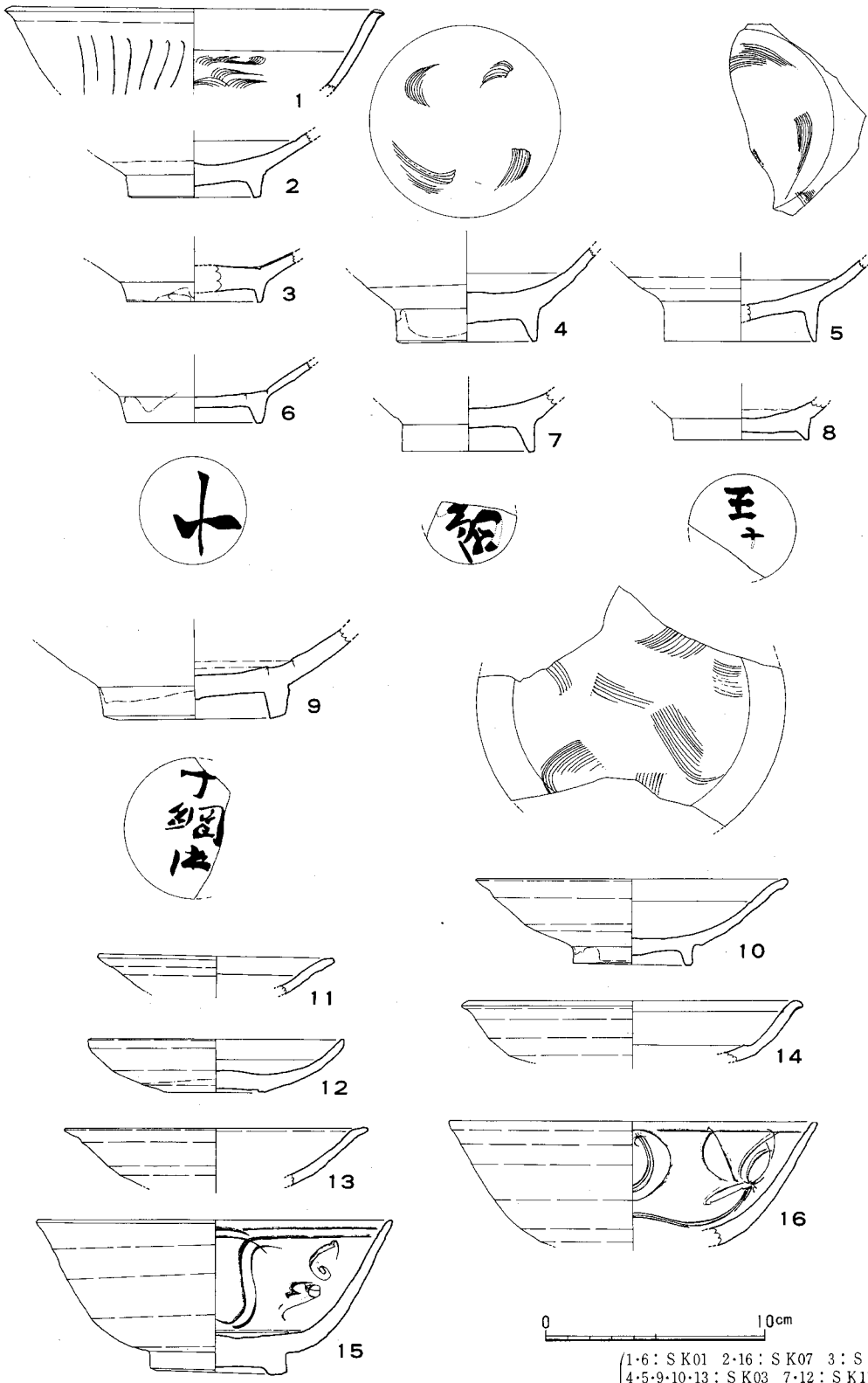



Fig. 19　土壙出土遺物実測図 (2) (1/3)

(1·6：SK01　2·16：SK07　3：SK04
4·5·9·10·13：SK03　7·12：SK11
8：SK06　11：SK02　14：SK15
15：SK08)

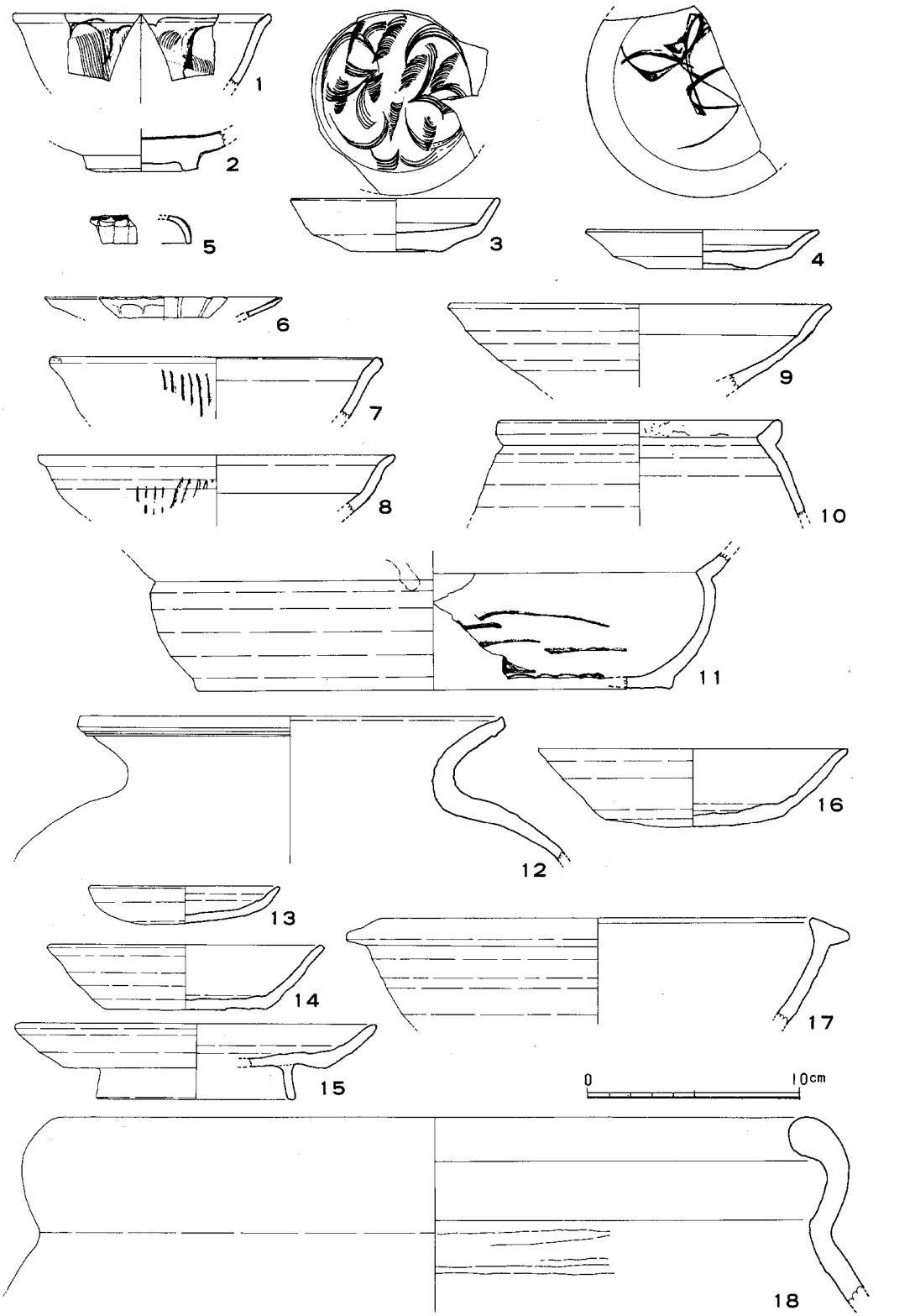



Fig. 20　土壙出土遺物実測図 (3) (1/3) (1・3：SK02, 2・8：SK16, 5・13：SK01, 4：SK04, 6：SK13, 7・9：SK07, 10・17・18：SK06, 11・14・15・16：SK03, 12：SK08)

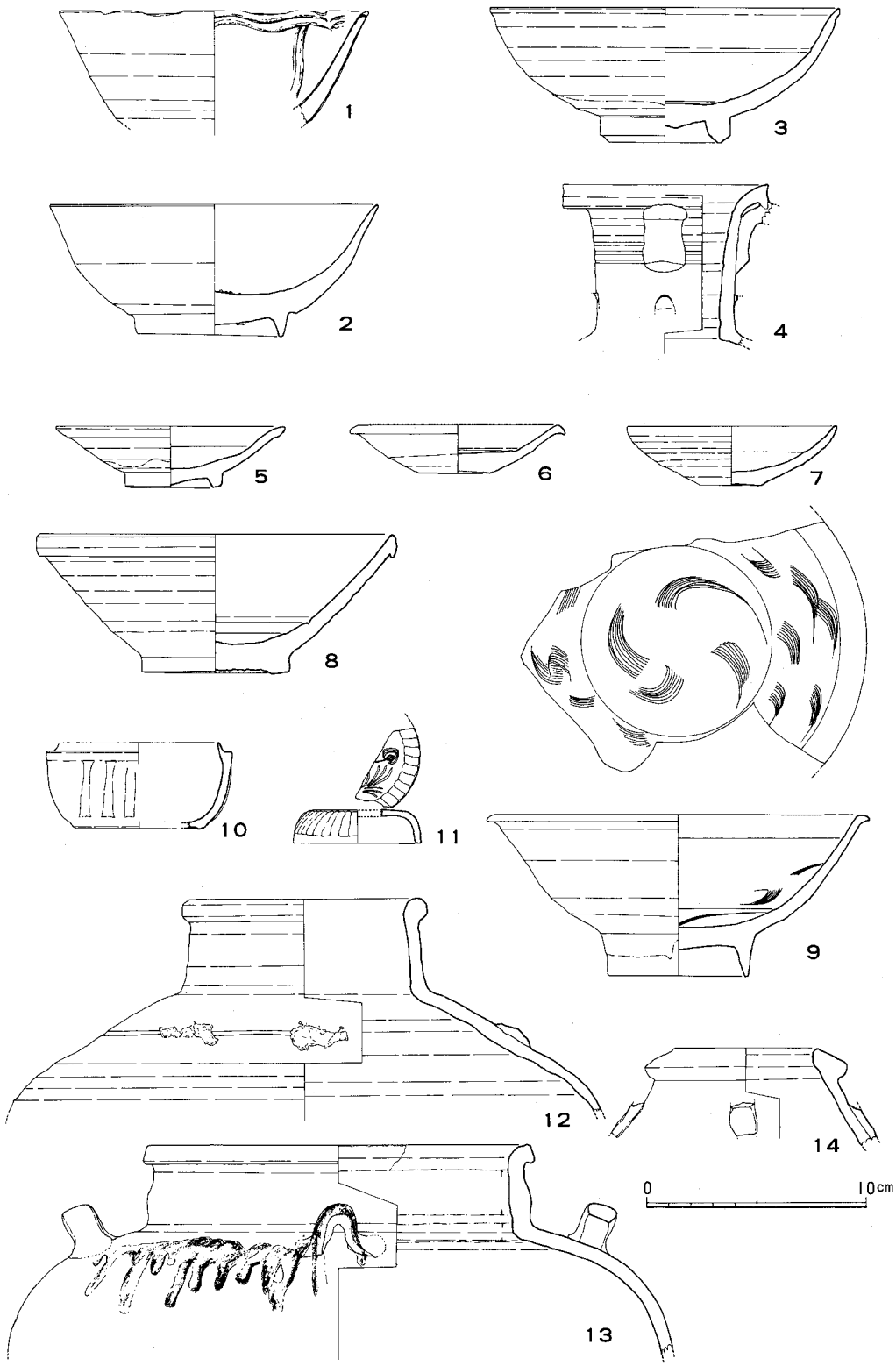



Fig. 21　攪乱層出土遺物実測図（1/3）

# Ⅳ　ま　と　め

これまで各遺構及び各遺構から出土した遺物について説明を加えてきた。調査面積の制約と－２ｍ以上に及ぶ撹乱を受けていたものの各遺構及び包含層、撹乱層から出土した遺物は非常に多い。できるだけ遺構から出土した遺物を中心に取り扱ったが、遺物の量が多いため充分に図化できなかった憾みがある。ここでは各時期ごとに概括してまとめとしておきたい。

時期的に最も古いものは弥生中期前半代に属する甕棺が１基ある。黄白色の基盤層である砂層に掘り込まれ、ほぼ水平に近い状態で埋置する。他に中期前半代の小児甕棺や成人棺の破片が、現位置から遊離した状態で出土している。本来は数基の甕棺が存在した可能性がある。ＳＫ10からは甕棺墓の副葬品か祭祀に関係ある丹塗り磨研の鉢形土器が出土している。甕棺墓は地下鉄路線内店屋町工区のＡ～Ｃ調査区から16基、祇園駅出入口に２の北半部から６基出土している。店屋町工区ではＡ区東南隅からＢ区全域に広がりＣ区北部までベルト状に分布することが確認された。さらにこのグループが祇園駅出入口２調査区の甕棺群に連なるものと考えられている。今回の調査区は出入口２調査区の直ぐ西隣りになっており、甕棺群の広がりを追証する形となった。つまり店屋町工区の東長寺付近から南西に伸びる古砂丘上に甕棺墓群が広がり、その広がりの一端を今回の調査で確認し得た訳である。この甕棺群は中期前半代の汲田タイプが中心となるが、Ｋ－１号甕棺は口縁内側が肥厚し、やや外傾することなどから時期的には新しくなるものと考えられる。

古墳時代の遺構は方形にめぐる溝が１条ある。調査区南西側で確認され大部分は調査区外へ伸びている。かなり削平はされていたものの、溝内からは５世紀初頭の土師器類が出土している。図化できるものは少なかったが破片としてはかなりの数にのぼる。古墳時代の遺構は博多遺跡群の南側に広がり、竪穴住居址、方形周溝墓、土壙墓、木棺墓などがこれまでに検出されている。すぐ隣接する第４次調査では今回検出した溝のつながりは確認されていないが、古墳時代の遺構群の広がり、溝の形状などから方形周溝墓の周溝の可能性がある。ただ遺構の一部なのであくまでも可能性に留めておきたい。その他、調査区北側で、５世紀初頭に属する土師器が一括して出土している。甕２、壺１、小形丸底壺１、器台２、埦１がほぼ完形に近い形で供献されたような出土状態を示す。本来は遺構に伴なうものであろうが、撹乱でこの部分だけが残され、遺構として把握することは困難であった。出土状態から住居址か墳墓に関係するものであろうか。

奈良時代から平安時代にかけての遺物も出土している。博多遺構群中央部では『和同開珍』や石帯、南側では鴻臚館式軒丸瓦や石帯などが出土しており、中央部から南側にかけて奈良時代の遺構・遺物が広がる。第24次調査区はその中間にあたり、遺構の広がりが考えられたが、撹

乱のためはっきりしなかった。

第24次調査で最も中心的な遺構は5基の井戸址と16基の土壙である。遺構内からは11世紀以降の遺物が多量に出土している。撹乱で削平を受けた部分もかなりあると考えられ、撹乱層からも11世紀以降の遺物がまとまって出土している。輸入陶磁器で最も多いのは白磁碗・皿類である。その他破片としては壺と瓶がある。青磁は龍泉窯系、同安窯系共にあり、碗・皿が主体を占める。量は少ないが、青白磁合子・皿や磁灶窯系の黄釉鉄絵大盤などがある。その他、褐釉瓶・水注、褐緑釉瓶・壺・鉢、灰緑釉甕、茶緑釉甕、雑釉の捏鉢などが出土している。量的に最も多いものは土師器の坏と皿である。ヘラ切り及び糸切り底の両方がある。その他、瓦器碗や皿、瓦質土器の火舎、大きな平底で外面格子目、内面同心円文のタタキをもつ須恵質の甕などがある。また、縄目タタキの布目瓦(平瓦・丸瓦)、滑石製の石鍋や頁岩製の砥石なども出土している。白磁碗は「博多出土貿易陶磁分類表」のIII～IV類に相当し、IV類が最も多く、次いでVI類となる。龍泉窯系青磁碗ではI類の5・6が中心となり、時期的に古いと考えられる脈入り蓮弁を持つ小形の碗も存在する。その他、器外面に鎬蓮弁を彫刻するII類も量的には少ないが出土している。同安窯系青磁碗ではI類が多い。以上第24次調査の陶磁器類は、時期的には11世紀から始まり、12・13世紀が中心で、14世紀まで続くと考えられる。

白磁の中で注目されるのは、外底面に墨書された碗が数点あることである。「丁綱□」「□綱」「王□」「＋」などと読める。他に読解できないのが幾つかある。墨書磁器については、西に隣接する第4次調査地点で100点近く出土している。最も多いのは「丁綱」で41点あり、白磁碗、白磁皿、天目、白磁四耳壺、同安窯系青磁碗、青磁皿等の各器種に書かれていた。他に10種類以上の墨書銘が確認され、いずれも中国人に関係ありそうである。第24次調査出土の墨書磁器も第4次調査出土の墨書磁器と一連のものとして考えることができる。博多では日宋貿易が盛んになり宋商が多数居留したことが、栄西の申し状に「宋人百堂」とあることからも推察できる。これらの墨書磁器が、「宋人百堂」と関係あるものか、今後の検討が俟れるところである。

以上、博多遺跡群のほんの一角である第24次調査地点について報告を行なってきたが、ここだけで遺跡は完結するものではない。博多遺跡群では、これまで地下鉄路線内、築港線道路拡幅工事などの公共事業に加え、民間開発も24次に担っている。調査は以後も継続されており、点的な調査の総合によって博多遺跡群の全容が解明されるものと思われる。

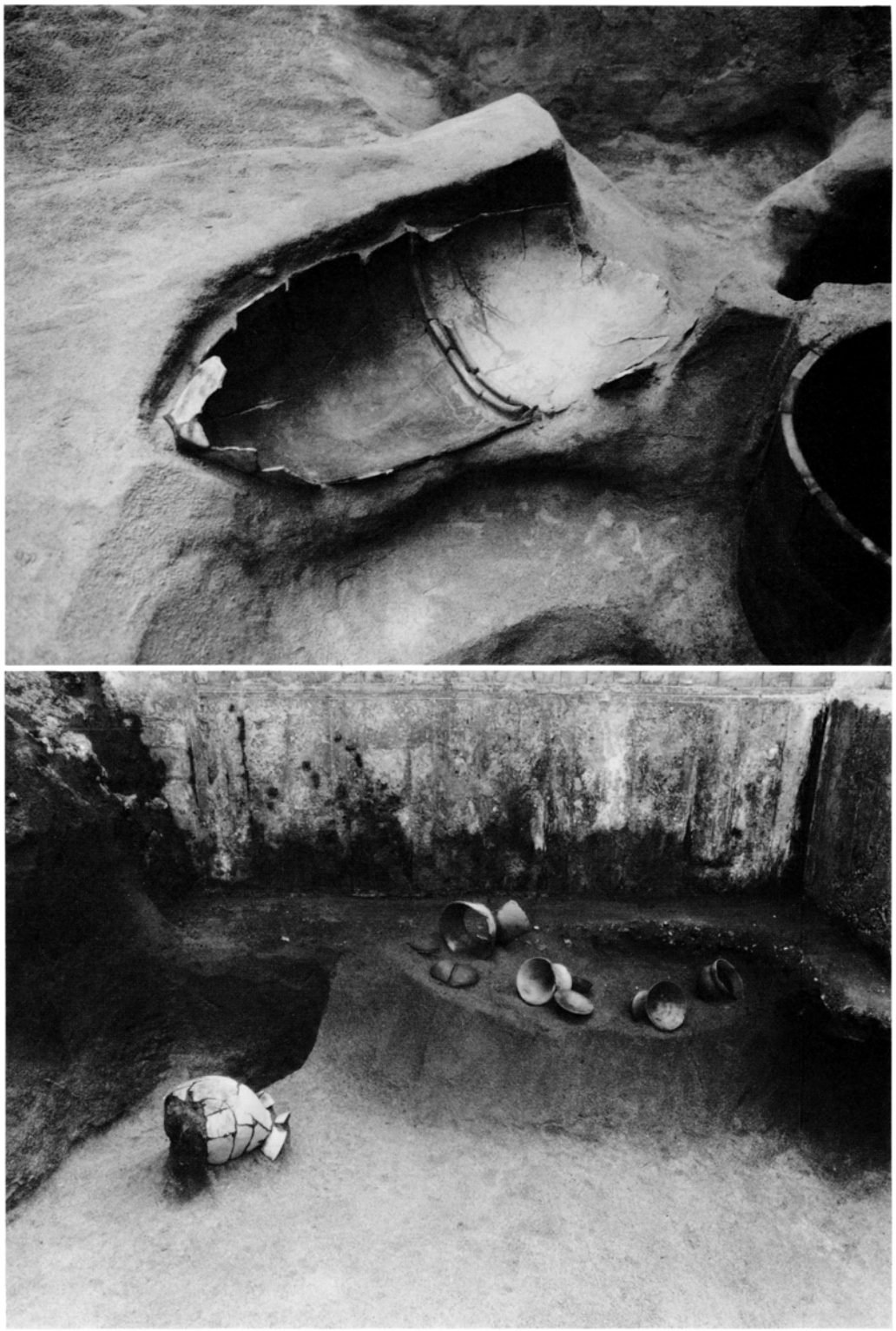
なお、本報告書を作成するに当り以下の報告書を参照させて頂いた。

〔参考文献〕

池崎譲二・折尾　学編　『博多Ⅰ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集　1981
折尾　学他編　『博多II』—図版編—福岡市埋蔵文化財調査報告書第86集　1982
小畑弘己・池崎譲二編　『博多』—高速鉄道関係調査(1)—　高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告IV　福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集　1984
中山平次郎著　『古代乃博多』　九州大学出版会　1984

# PLATES

（上）調査区南側全景　（下）調査区北側全景



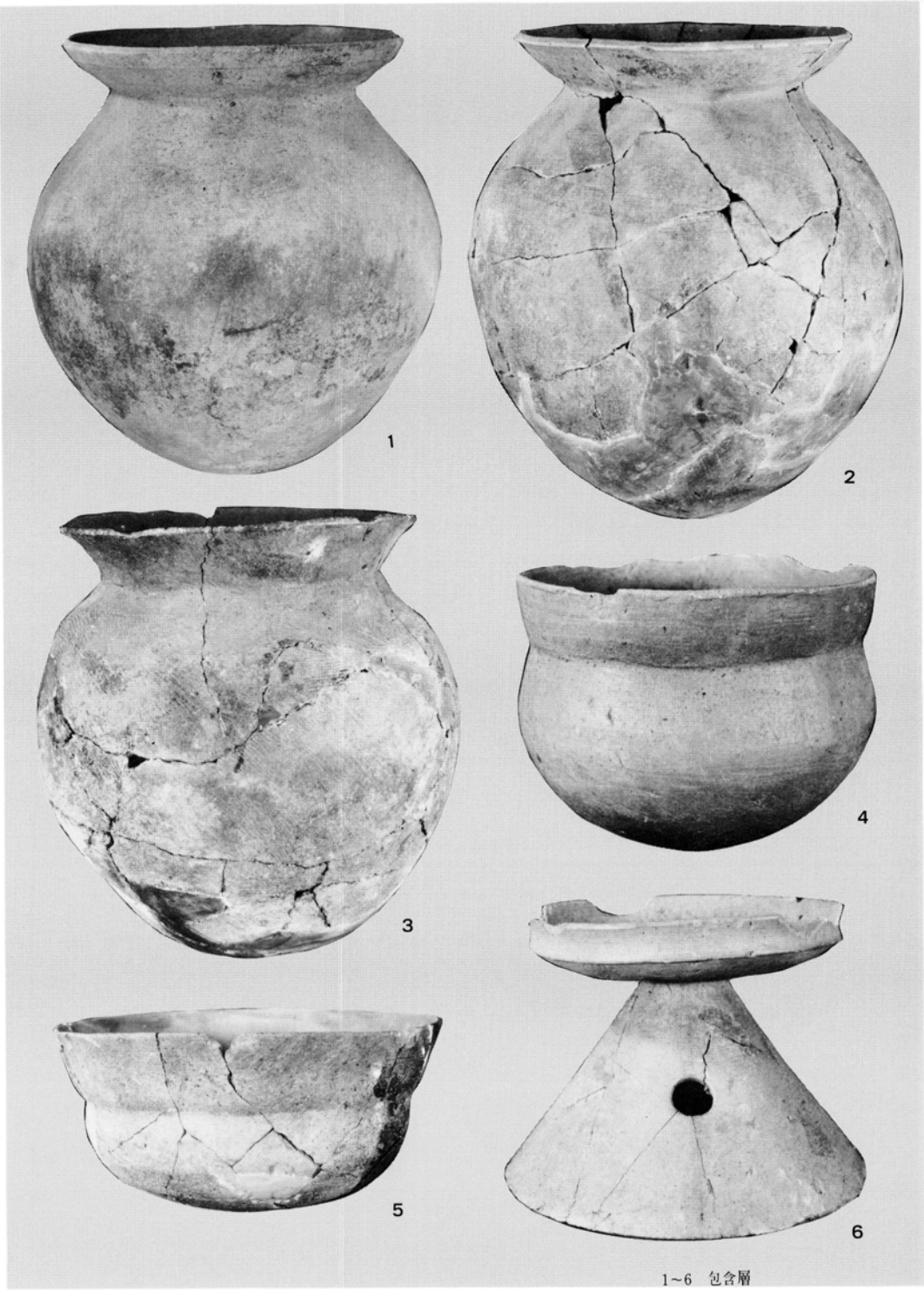
（上）K－I号甕棺墓出土状況　（下）包含層土器出土状況

（上）SE01井戸址出土状況　（下）SE02・03井戸址出土状況

（上）SE04井戸址出土状況　（下）SE05井戸址出土状況

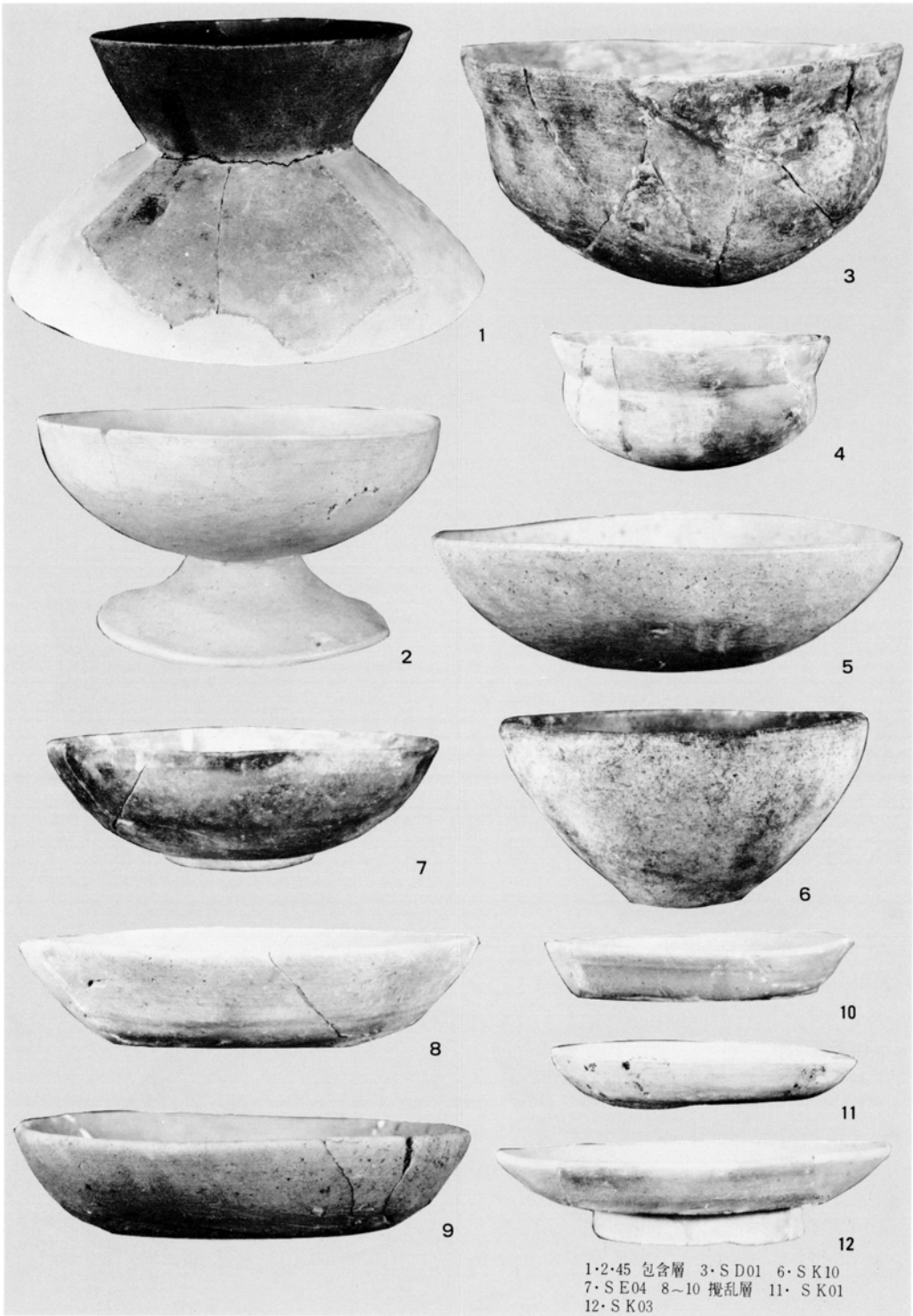
（上）SK01土壙出土状況　（下）SK05土壙出土状況

（上）SK06・07土壙出土状況　（下）SK10土壙出土状況




1~6 包含層

出 土 遺 物 (1)




1·2·45 包含層　3·SD01　6·SK10
7·SE04　8～10 攪乱層　11·SK01
12·SK03

出土遺物　(2)

# 博多 Ⅳ

福岡市埋蔵文化財調査報告書第119集

1985(昭和60)年３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目７番23号

印　刷　株式会社チュー エツ
福岡市博多区東比恵２丁目９番１号